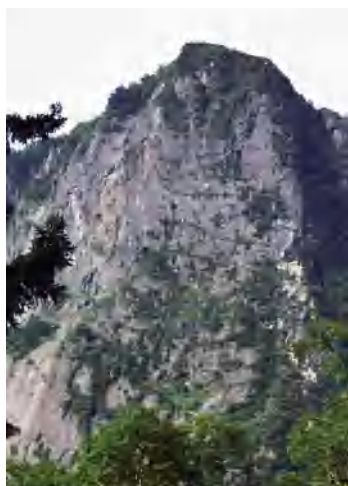




*yamaaruki
& musen*

特集 ■ 北アルプス

表紙の話



写真フィルムの整理をしていて見慣れない写真が出てきた。

前後関係から推測すると、初めて父と行った奥穂高への途中で撮られたもののようだ。

このときは父がカメラを持っていたので、多分父が撮ったものだろう。

生前父と山の話などほとんどしなかったが、最近になって父の書いたものを見る機会があったが、それによると多少岩もやっていたようだ。

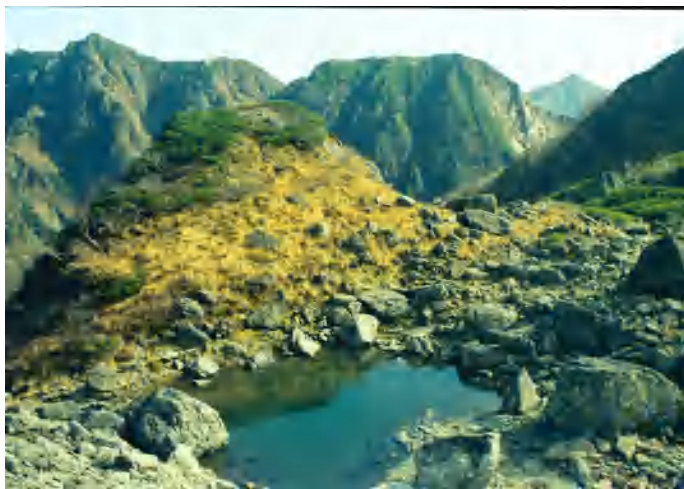
そのようなことで、このような写真を撮ったのだろう。

秋の日の天狗池

秋の日的一天、上高地の喧騒を離れて天狗池まで行ってみた。

槍ヶ岳への登山道から離れると小さな池があった。もう少し大きいかと思っていたが、こじんまりとした池だった。

そんな池の傍らで、秋の日的一天ぼんやりとしていた。





天狗池に映る槍ヶ岳

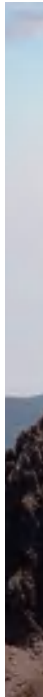
CONTENTS

■ 特集 ■ 北アルプス

憧れのジャンダルムへ	1
焼岳は今でも活火山	6
鏡平から笠ヶ岳へ	10
不帰ノ嶮を越え白馬へ	16
白馬岳から日本海を目指して	22
大日連峰からの劔岳	31
北アルプス周辺山行記録	37

■ 無線機を持って山へ

尾瀬なのに静かだった笠ヶ岳	38
夏の日の馬頭刈山	41
落葉を踏みしめ滝入ノ峰へ	44
立派な登山道のあった笹ノ岩山	48
青柳から歩いて登った入笠山	51



憧れのジャンダルムへ

山行日：98/08/08～11

70年の夏に父と奥穂高岳の山頂に立ったとき、「あれがジャンダルムだ」と教えられて以来、いつかはあの岩稜の頂から奥穂の山頂を見たいと思っていた。しかし、一般のガイドブックでは、西穂高、奥穂高間は破線表示の熟達者向けのコースのため、我流で山に登っていた私にとっては、技術的な不安が多少あったが、体力的には今をおいてはないだろう。そのため今年（1998年）の夏に西穂高、奥穂高間の縦走を計画したのだった。

8月8日に新穂高行き深夜バスで新宿を出発し、9日は軽く足馴らしに西穂を往復して西穂山荘に泊り、翌10日に憧れのジャンダルムへと向かった。

★ 最初は単独で行こうと思ったが・・・

10日の早朝に西穂山頂にいたほとんどの人が、奥穂を目指す人達だった。中には中学生位の子供を連れた親子連れもいた。しかしこの親子連れ、途中で一緒になったが父親はかなりのベテランのようで、子供のすぐ後ろから「ホールドはもっと上だ、スタンスをちゃんと」とかアドバイスをしていた。このような人がいると岩登りも上達するだろう。

さて、私自身はどうするかだが、体調や天気も特に問題はなさそうだったので、最初からの予定通りジャンダルム經由奥穂高行きを決行することにした。このときはまだ安曇村周辺で地震が頻発しているということは知らなかった。実際山行中に地震は無かったので良かったのだが、もしガレ場を登っている時に地震でもあったらと思うとゾッとする。

本来私は単独行でなるべく人と距離を置いて歩くのだが、今回は7、8時間はかかるかもしれない危険なルートに行くことになるので、一人ではやはり心細かった。そこで独標で話をした人（この時は2人+1人の混成グループになっていた）の後をつけて行くことにした。しかしなぜかこのグループとは奥穂につくまでに再び会うことはなかった。

いよいよ西穂から先は未知のルートになる。西穂山頂から這い松の下りを降り始めると、これが何と足掛かりがなく降りられない。前のグループがでこずっていたのもうなずける。すぐ後続者が来たので余計あせってしまったが、この人のアドバイスでなんとか西穂山頂から目の前に見えたピークを越えることができた。この時この人から「一緒に行ってみませんか？」という事を言ってもらった。相当危なげに見えたのだろう。もちろんお願いをした。

道々話をしたところ、愛知県在住で奥美濃の藪山や鈴鹿の岩をやっているという。仕事もとび職のようなことをやっているので岩もヒョイヒョイいちゃうんですねと自嘲気味に話していた。しかし、今回この人と出会わなかったら果して西穂-奥穂の縦走はどうなっていただろうか。

★ 緊張の連続だったジャンダルムへの道

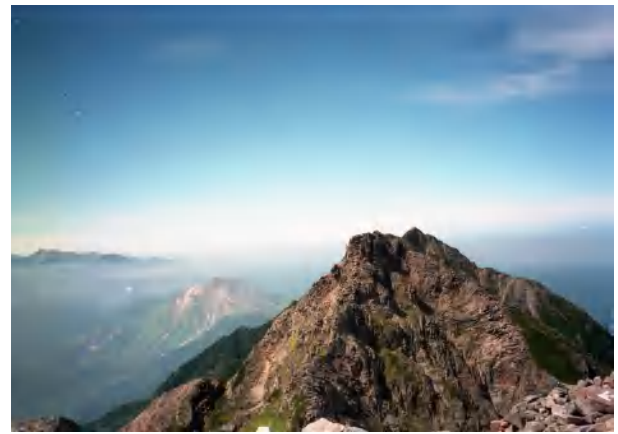
目の前にスラブ状の岩壁が見え一本鎖が垂れていた。これが良く本などで見る“逆層のスラブ状岩壁”のようだ。ちょっと登りはじめは足掛かりがつかめず手こずっ



天狗岳山頂

だが、ホールドをうまく探せば私でも鎖なしでも登れそうだった。しかし、ここは慎重を期して左手で鎖、右手でホールドを探しながら登った。ここを登り切ると岩稜のピークが見えてきた。そこまで行くと標識があり確認するとそこが“天狗岳”だった。気がつかない間に赤石岳、間ノ岳と越えてしまっていたようだった。

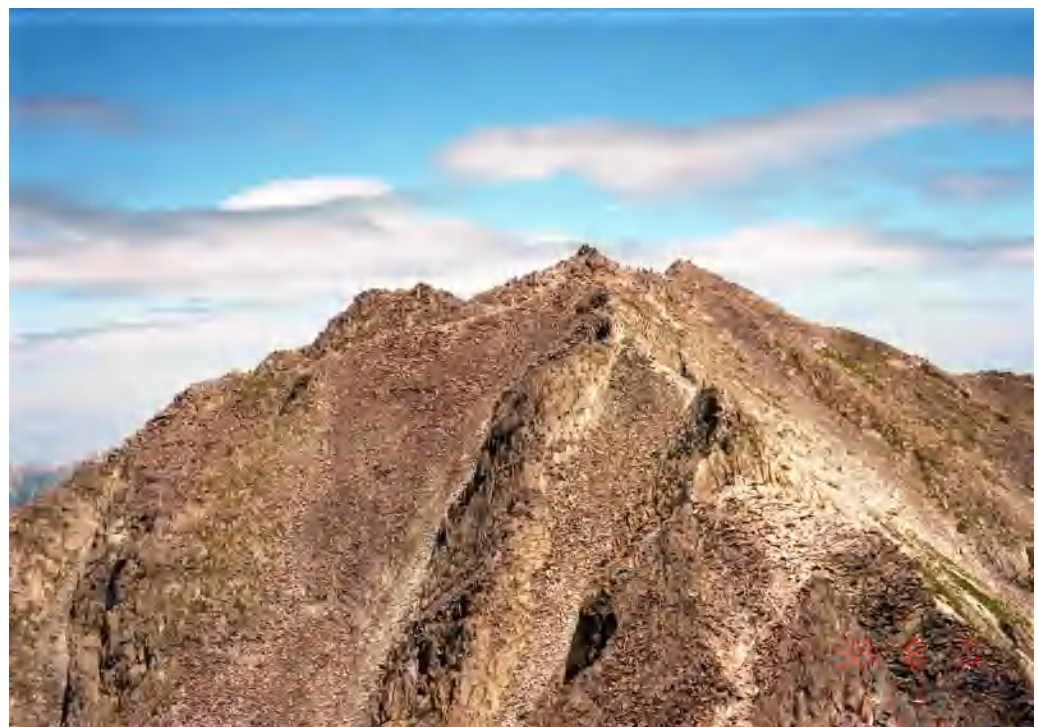
ここで大休止とした。天狗岳の頂上は、10人ほどで一杯になってしまうような広さだった。ここで何か食べようかと思ったが、緊張のためか胃が受け付けず“エネルギー飲料”を飲む。前週の杖差岳に行った時、試験的に持っていき良かったので今回4パックを持ってきていた。



天狗岳山頂から西側を見る

天狗岳では15分ほど休んで出発。いよいよ核心部－ジャンダルムへ向け出発だ。ここからも鎖、長い岩稜帯の登りは続く。暫く行くとちょっと小広くなったところに着いたので休憩とした。西穂－奥穂のルートではあまり広い平らな場所はないので、期せずしてここで同じころ西穂山頂を出発したグループが集まってしまったようだ。

5、6分休んでから出発。少し行ったピークから前にジャンダルムらしいピークが見える。しかし、奥穂から見たあの形の整ったドームの形をした姿ではなく、岩を積み上げただけのような形をしていた。もうジャンダルムを西穂側から見ることはないだろうから、ここでちょ



ジャンダルム頂上
後方は奥穂高岳

と写真を撮っておくことにした。

さらに行くとも岩が道を塞ぐようになっていてどうにも通れない。ちょうど前にいた親子連れの父親は「前来た時はこんなじゃなかったから落石でもあったのだろう」という。なんとかそこを通過するとすぐ前がジャンダルムへの登りだった。一度コルへ降り岩稜を登る。一本の鎖が目の前にあったが、先行者は鎖に頼らずマークをたよりにトラバースルートに登っていったのでついて行くとピークが見えてきた。

★ ジャンダルム頂上からの無線運用

11時46分。憧れのジャンダルムについに着くことができました。そこでまず目にはいったのは、前に大きく聳える奥穂高岳。頂上付近には登山者の姿が点々と見えている。双眼鏡でもあれば顔まで見えるような近さだ。そし

て槍ヶ岳、前穂などの山々。360度のすばらしい展望だった。

休むのもそこそこここでもう一つの目的、50MHzの運用をするためにピコ6を取り出した。取り敢えずホイップを付け電源を入れる。VXOを回していくと一局移動局が出ていたのでスタンバイするのを待ちコールする。と?!なんとスタンバイスイッチを押してもパワーメータはピクリともふれない。そして送信LEDもつかないのだ。そこで外部マイクに変え送信してみたが、やはり送信出来なかった。そんなバカな?。

そこで仕方がないので、サブで持ってきていた430MHzのトランシーバーをだし、メインでCQを出すことにした。何度かCQを出すとやっと高山市内モバイルから応答があった。山にはそれほど興味のある局ではないようだが、珍しい所ということを強調しQSLを頼ん



① ②

③

- ① ジャンダルム頂上手前から見上げる
- ② ジャンダルム頂上から西方面
- ③ ジャンダルム頂上は狭い

だ。その後もう一局高山市内のモービルの局が呼んできたが、この局は多少は山をやっているらしく、槍ヶ岳には良く行くという。2局QSOしてQRTしようとする
とJE9???という局がコールしてきた。YL局だったのでもしかしてと思ったが、案の定「山ラン」メンバーのJE9JPV局だった。仕事の昼休みに出て来たという。そういえば今日は月曜日だった。最初応答が少なかったのは平日の12時前だったからなのだろうか？

西穂から同行してもらった単独行の人には、無線をやるため待ってもらう訳にはいかないため、先に行ってもらっていたので、今ジャンダルムの頂上には私一人しかない。QRTしてから写真を撮っていなかったことに気がつき、奥穂、前穂、槍、笠など360度の展望を撮る。そうしている時男性二人のグループが頂上にやって来たので、証拠写真のシャッターを押してもらった。

荷物の整理をしてそろそろ出発しようかと思っていたころ、今度は若い男女の二人連れが登ってきた。しかし、奥穂の方をチラッと見ただけで直登ルートのようにスタスタ歩いて行き、下っていったようだ。かなりのベテランなのだろう。目も眩みそうな所を……。その後その若い男女はどこに行ったのか会うことはなかった。

★ “馬ノ背”よりも恐かった

“馬ノ背”手前の岩稜の登り

12時30分。ジャンダルムを出発する。無線運用をしたので45分もいたことになる。さてここからは一度登ってきたルートを下るのが、奥穂方面への分岐が良く

わからない。そこで上からルートを確認すると、少し下に道がついていた。そこで元の所に戻りペンキマークを探しながら左へ行くと鎖があり、上から見た道へ降りることができた。

ジャンダルムを多少捲きぎみに行くと前方に4人のグループが鎖を下ってくるのが見えた。その鎖場を登りトラバースして行くと前方に急な岩だらけの斜面を下ってくる中年の男女がいた。

私のほうが鎖を伝って下るのがちょっと遅かったので、ちょうどコルになった所で二人連れは休んでいた。この二人は小屋に荷物を置いてジャンダルムに登りに来たという。そこで私もそこで休むことにしたが、二人連れの話しから考えると今トラバースして来たのが“ロバの耳”になるようだ。

私はここで10分ほど休んでから急斜面に取り付く。かなり不安定な岩もあり、慎重にホールド、スタンスを選んでいく。何か下のほうで声が聞こえたような気がしたが、下など見られるような状況ではなかったので無視して登り続け、多少安定した場所に来た所で下を見ると、一人の登山者がコルで休んでいた。落石でもされたら嫌だからだろう。

そこからは多少傾斜もゆるくなり登りも楽になった。そしてそこを登り切るとついに奥穂山頂と“馬ノ背”の見える場所に出た。“馬ノ背”は幅が狭く両側が切れ落ちているという記述がガイドブックにはあったので、平らで幅の狭い所だろうと思っていたが、実際の“馬ノ背”はまるで予想していたものとは似ても似つかないもの

奥穂高山頂には
祠がある



だった。それはヨーロッパの山岳映画で見た事のあるような、岩稜の登りで、馬の背中というよりも恐竜の背中(?)という感じだ。

白いペンキで「ウマノセ」と書かれた岩に手掛りを見つけよじ登り、ちょっと脆そうな板状に突き出た岩を登って行くと、ほんの少しで勾配も緩やかになり、飛騨側の砂礫の道に降りると奥穂頂上まではすぐだった。

★ 10年ぶりの奥穂山頂

もう緊張するような岩稜の登降はない。10年ぶり4度目の奥穂山頂には、ジャングルムから見た時沢山いた登山者はまばらになっていた。ピークには石を積み上げた上に穂高神社の石の祠があり、登山道を挟んだ反対側には方位板がある。その間を歩いていくと小広い所へ出る。そして前方には前穂への道が続いていた。ここからも360度とは言えないまでも笠ガ岳、槍ヶ岳などがよく見える。ここには日陰になるものがないのでちょっと暑い。適当な石を見つけてその上に腰をおろして休むことにした。

まず無線をやってからゆっくりすることにして、トランシーバーをザックの中から取り出す。本来なら50MHzをやるのだが、ジャングルムで送信不能だったので430MHzでCQを出すことにした。

さて奥穂山頂では双六岳に移動している局が呼んで来た。これから槍ヶ岳へ行くとのことで、「山ラン」の話をする。インターネットで「山ラン」について調べて知っているという。その後呼んで来たのは西穂山荘からの登山者だった。

小屋は混むのではないかと思います、2局と交信しただけでQR Tとする。そしてフルーツの缶詰を食べてから小屋へ向かうことにした。

鎖とはしごのある所に着くと、下に小屋が見えている。沢山の人が小屋の前のテラスで昼寝をしていた。15時30分、穂高岳山荘に着いた。

(おわり)



長かった一日 ジャングルムをバックに

◎ 山行ルート ◎

■ 08/08~09

新宿 = 新穂高 = 西穂高口 (ロープウェイ) → 西穂山荘 → 西穂高岳 → 西穂山荘 (泊)

■ 08/10

西穂山荘 → 西穂高岳 → 天狗岳 → ジャングルム → 奥穂高岳 → 穂高岳山荘 (泊)

■ 08/11

穂高岳山荘 → 涸沢 → 上高地バスセンター = 新宿

◎ 運用設備 ◎

X 2 1 - T

(430MHz、5/8λのホイップにて運用)

焼岳は今でも活火山

山行日：96/08/13~16

● 雨の降る中を西穂山荘へ

新穂高温泉から第一、第二ロープウェイと乗り継いで頂上駅に着いたのは6時50分頃だった。駅には頂上駅の気象状況が「くもり、15度、風速2m/s」と出ていたが、やはり天気はあまり良くないようだ。

ロープウェイの駅を出ると沢山の家族連れが休んでいて、臨時の郵便局も開設されていた。ここが2156mの山の上だとは思えないほどである。あいているベンチを探さずは腹ごしらえをする。ちょうど座った所からは新穂高から上がって来るロープウェイが良く見えていた。

食事を済ませ荷物の整理が終わった頃、今にも降り出しそうだった空からついに雨粒が落ちてきた。そのため雨

具を着て出発。このコースは、ロープウェイで来られるため家族連れが多い。そのため山頂駅を出てから少し行った所に、避難小屋と注意書の大きな看板が立っていた。そこから樹林の中を一時間弱登って行くと、霧の中に3階建のログハウス風のきれいな建物が見えてきた。それが西穂山荘だった。

雨は相変わらず降っているので、今回もまた西穂山頂までは行けないかと思ったが、雨は降ったりやんだりを繰り返しているため、少し小屋の前で休んで様子を見ることにした。

● 雨の西穂山頂で無線をやる

9時。雨は上がったが相変わらず小屋周辺はガスで覆われていて何も見えないが、山頂に向け出発することに



登ってくるロープウェイを見ながら食事



三度目の正直で登った西穂高岳山頂

した。小屋からすぐ急登が始るが、そこを登りきるとゆるい登りの這い松帯となり、少しの間ガレ場が続く。1時間ほどガスであまりまわりの見えない所を行くと、急にガスが風に流され、前方に人がたくさん休んでいる岩峰が見えてきた。独標のようだ。小屋から1時間強で西穂独標に着いた。ここまではかなりの人が来るのだろうがここから先、西穂山頂まで行く人はあまり多くないので、皆のんびり休んでいる。そのため私もちょっとウトウトしてしまい30分ほど休んでしまった。

独標から30分ほどでピラミッドピークに着く。ここからまた天候が悪くなったが、ここまできたからには西穂山頂まで行かなければと思い先へ進む。しかし、西穂の登りにかかった所でまた雨が降り出した。今度はかなり強く、雨具を出して着ることにする。しかしそれも5分ほどでやみ、ガスが切れると前方に岩峰が見え、そのピークに道標のような物が立っているのが見えた。あれが西穂の山頂のようだ。山頂直下の登りは岩に手掛かりがなく、その上雨で滑りやすくなっていたためちょっと手こずったが、山頂にはちょうど12時に着いた。山頂には二人の登山者が休んでいるだけだった。

今は雨は降っていないがいつ降り出すかわからないので、取り敢えず430MHZでCQをだしてみる。何回かCQを出していると岐阜県大野郡のキャンプ場にいる局からコールされる。サブに移ってQSOしているとまたもや雨が。今度は風を伴って横殴りの雨になってしまい、QSOは早々と切り上げなければならず、50MHZでの運用はあきらめるしかなかった。三度目の正直で登ることの出来た西穂山頂もまたもや雨で、30分ほどの滞頂で下山することにした。

西穂山頂とピラミッドピークの間には花がたくさん咲いていたのだが、ゆっくり花を愛でるなどという状況ではなく残念だった。1時間弱で独標。独標には来た時とは違いほとんど人はおらず、静かな山頂だった。20分ほどの後ガスで覆われ、数メートルしか視界の効かない中を小屋に向け出発した。独標からの下りを過ぎると後はそれほど緊張する所はなく、1時間弱で小屋へ着くことができた。

この日は19時を過ぎる頃になると、小屋の外はだん



西穂山荘

だん風雨が強くなってきた。そして翌日15日はやはり一歩も外へは出られず、小屋に停滞ということになってしまった。

● 予定通り焼岳へ

4時頃に人の話し声で目を醒ましてしまった。外はまだ風が強くふいているが、雨は降っていないようだ。朝食は5時からなのでまだ横になって外の様子をうかがうことにする。

昨日に比べて宿泊者が多いためか朝食の準備に手間取っていたようだが、5時にはかろうじて間に合ったようだ。今日は少し長く歩くのでしっかり食べておく。夕食と同じように昨日とは別のメニューだった。ほとんどの人が連泊だったのでそうしたのか、それともいつもそうなのかは知らないが、最近の北アルプスの食事は豪華になったものだ。

荷物を持って下へ降り、受付けの横にザックを置き外に出てみる。雨はもうすっかり上がっているようだがまだ視界は良くない。6時少し前、小屋の人に挨拶をして荷物を持って外へ出る。多少薄日が射してきたような気がするがどうなるだろうか。

小屋の写真を撮っていると昨日食堂で話しをした大阪の人が話し掛けてきた。「なんか晴れそうだからジャンダルム一緒に行きませんか」という。この人は単独行なのでやはり心細いのだろうか。一瞬行きそうな気持ちになったが、今回はグッと堪えて見送る。出発して行く人はほとんどが独標か西穂高岳へ行くようで、小屋からすぐの急登を登って行く。焼岳へは小屋とテント場の間にある「上高地方面」への道に行く。

● 焼岳小屋までは展望の無い樹林の中に行く

5分ほど行くと大きな道標があり、「左上高地、右焼岳・中尾温泉」と書かれている。木の根が出た坂を降って行くと60歳代の夫婦と出会った。西穂山荘－焼岳小屋のコースは今年のシーズンの始まりにでも手入れがされたのか、至るところに新しいペンキの印があり、下草も刈り払いがされている。しかし昨日降った雨で草が濡れているのだろう、知らない間にだいぶズボンが濡れてしまった。

樹林の中の道は1メートル位の幅のある所や湿地帯のため木の切り株が置かれていたり、倒木があつたりと変化に富んでいる。50分ほど行くと笹が刈ってあり右側が開けた所に出た。ガスで何も見えないが、晴れていれば多分下に梓川でも見えるのだろう。そこからちょっと行った所に「(焼岳) 小屋へ1キロ」という標識があった。「速いんですね」という声に振り向くと60歳後半と思える男性の登山者がそこに立っていた。西穂山荘から焼岳小屋に行く間であったのはこの男性と60歳代の夫婦連れだけだった。

そこからちょっと登った所から道は下りとなる。かなり急な下りもあり道も細くなってきた。どのくらい降ただろうか、急に今まで山肌で遮断されていた右手が開け、背の低い木や草の上に緑色をした屋根が見えてきた。それが焼岳小屋だった。平屋のこじんまりした小屋だった。

小屋に着く手前に「展望台10分、焼岳頂上1時間」という道標があり、その近くにザックをおろし汗を拭く。小屋の前には山が迫っており、小屋と山の間からは所々が茶褐色をした焼岳の山肌が見えていた。

● 活火山焼岳への登り

ちょっと休んただけで焼岳へ向け出発する。後で気がついたが小屋で缶ビールを買っておくのだった。分岐を登り始めるとすぐ目の前が開け、初めて焼岳の全容を目にすることができた。この頃になるとガスもいつのまにか消えてきていた。展望台と書かれた杭の立っている所に着くと、真正面に焼岳が見える。まさに焼岳の展望台である。

展望台からちょっと降ると右に中尾温泉への道が分か

れる。焼岳への道は昨日の雨の後もなく、石のゴロゴロした道は乾ききっている。高度が上がって来ると共に風が強くなってきた。途中であった人に寒くないのですかと言われたが、8月とはいえ風が強いとTシャツ1枚ではちょっと寒いようだ。

降りてきた人が「この岩を登ったらすぐですよ」といって降っていった。その岩の基部を捲くように付いている道を登りきると小高い所に出るが、左側にはロープが張ってあり登山禁止になっている(南峰－三角点峰)。そしてそこには中ノ湯からの道が上がってきていた。この辺まで来ると硫黄の匂いがする。数年前まで登山禁止だった活火山なので、もう少し煙が出ていて匂いも激しいのかと思っていたが、それほどでもないようだ。しかし岩に「髑髏」のマークが書いてある横を通過する時は、他よりも匂いがきつくとまた暑く感じた。そこからちょっと急な所を登りきると頂上だった。

● 焼岳での無線運用

山頂には立ち木がなくアンテナを固定出来るようなものは山名を記した杭だけしかないが、まさかこれにアンテナを固定するわけにはいかない。人が来なければいいが、ちょっと下を見ると続々と登って来る登山者の列が見えた。そのため取合えず430MHzでCQを出してみることにした。すると安房峠を走っているモバイルや釜トンネルの近くを走っているモバイルから呼ばれる。その後岡谷の固定局とQSO。西穂では50MHzの運用はできなかったので、とりあえずホイップでワッチしてみることにした。すると群馬県甘楽郡の物見山から出ている局がいたのでコールすると51のレポートだった。50MHzはこの1局だけでQRTとした。この頃になると狭い山頂にはかなりの人が登ってきていた。

10時、今日中に東京へ帰らないといけないので、急いで荷物をまとめて下山にかかった。

● 中尾温泉へ2時間で駆けおりる

中尾温泉への分岐の手前には大きな岩があり、焼岳に登ってから西穂方面に行く人達ののだろうか、いくつかのザックがデポしてあった。ここでもう一度焼岳を振り返ってよく見ておく。もう一度焼岳を見たのは高山行きのバ

スの中からだった。

中尾温泉への道は昔から歩かれていたのかしっかりした道だ。45分ほどで「秀綱神社」という標識の建っている所に着いた。神社といっても大きな岩の前に小さな木の祠があるだけだったが由緒ある神社のようだ。そこからの道は幅も多少あり歩きやすそうだったので小走り下る。40分ほど行っただろうか、遠くに沢の音が聞こえてくると、左側の開けた所から遠くに滝が見えた。その滝は「白水の滝」というようだがこのコースは変化があって楽しい。この「白水の滝」展望台(?)から少し行くと林道に出るが、登山道はその林道を行くのではなく、その林道を横切りまた樹林の中を行き沢をわたると舗装道路にでた。

さらに京大の研究所やペンション、旅館などの建っている道路を行くと、「バス停近道」という標識があり、崖下に川に沿った自動車道路が見えて来ると「中尾高原口」というバス停に着いた。

13時に新穂高のバスセンターを出た高山行きのバス

は、「中尾温泉口」に5分ほどで着いた。平湯温泉辺りからの渋滞でかなりの遅れとなったが、15時頃の名古屋行きの特急には間に合い、21時には暑い東京に戻って来ることができた。

(おわり)

◎ 山行ルート ◎

新宿(深夜バス) → 新穂高温泉 →
新穂高ロープウェイ → 西穂山荘 → 独標
→ 西穂高岳 → 西穂山荘
西穂山荘 停滞
西穂山荘 → 焼岳小屋 → 焼岳
→ 中尾高原口(バス) → JR高山駅
(高山本線) → JR名古屋駅(新幹線)

◎ 運用設備 ◎

ICX-21T + ホイップ(430MHz)
ピコ6 + ホイップ(50MHz)

50年前の焼岳

前に見える大正池には立ち枯れの木が数本ある



鏡平から笠ヶ岳へ

山行日：94/08/11~13

8月12日、6時40分、ほぼ予定通り見覚えのある新穂高温泉の駐車場にバスはついた。夏だということにこの時間ではまだ涼しい。村営食堂や土産物屋はまだ早いのでシャッターが降りているが、その建物の一角に登山指導センターがあり、登山届／下山届の用紙がおいてある。今回も単独行なのでなにかあった時困るので、一応登山届けを出しておく。

● 大ノマ乗越への道がない

東京から来たバスは2台。そのほとんどの乗客はいつものまにか、笠ヶ岳、鏡平方面や新穂高ロープウエー方面に出発していた。鏡平方面に行くには、村営食堂のある建物に向かって左の道を橋を渡っていくのだが、その橋を渡ったすぐの所に東屋風の建物があり、温泉と水が出ていたのでちょっと飲んでいく。

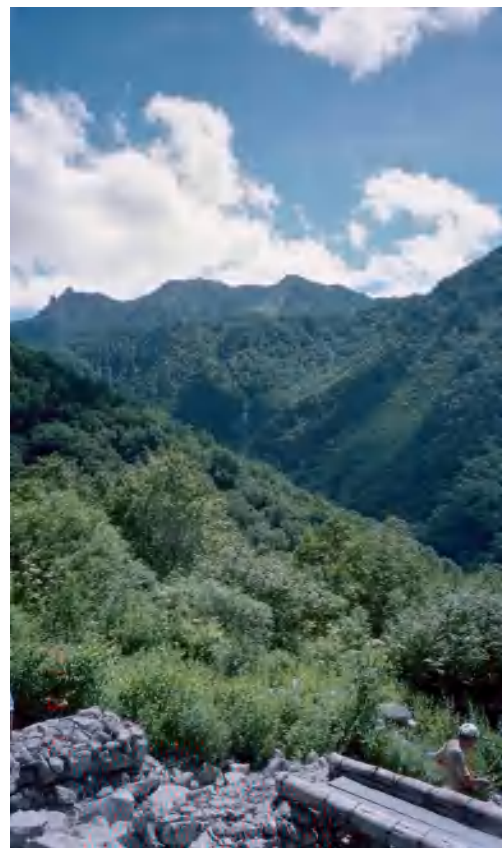
そこを出ると道はカーブしながら数軒の旅館が並ぶ間

を登って行くと10分ほどでゲートにつく。以前来たときはゲートを過ぎるとすぐに未舗装の道だったように記憶しているが、今見ると所々簡易舗装された道になっていた。

笠新道の分岐まではほぼ予定通りに着いた。それほど疲れていなかったが、10人ほどの登山者が休んでいたのので小休止とした。しかしそこからワサビ平小屋までは思ったよりも早く着いてしまったので、休まずに行く。やはり笠新道を行くのでなければ、分岐で休まず、ワサ



登山口の新穂高温泉



秩父沢で一息入れる

ピ平小屋まで来て休憩をとったほうが正解だろう。ここには道のすぐ脇に水場もある。今年は渇水の影響か、ここから先は秩父沢以外にはもう水場はなかった。

左俣林道では所々日に照らされて歩くこともあったが、割合ブナなどの木もあり、日を遮ってくれて涼しかった。その林道が左俣谷を渡る橋の手前から、小池新道は始まっている。小池新道に入ると浮石の多いガレ場などの登りがあり、容赦なく日に照らされるようになる。しかし、高度が増すとともに視界も開け、中崎尾根に遮られていた穂高連峰も見えてきた。

秩父沢に着くとたくさんの登山者が休んでいた。日陰を探し私もここで小休止。勢いよく流れる沢の水に手をいれりと冷たい。顔を洗い口を濯ぐ。ここからは穂高連峰がちょっと霞んでいるが、雲はなくよく見えている。先はまだ長いので余りゆっくりしてられないが、しかしちょっと眠たい。バスで熟睡できなかった影響がでてきたようだ。

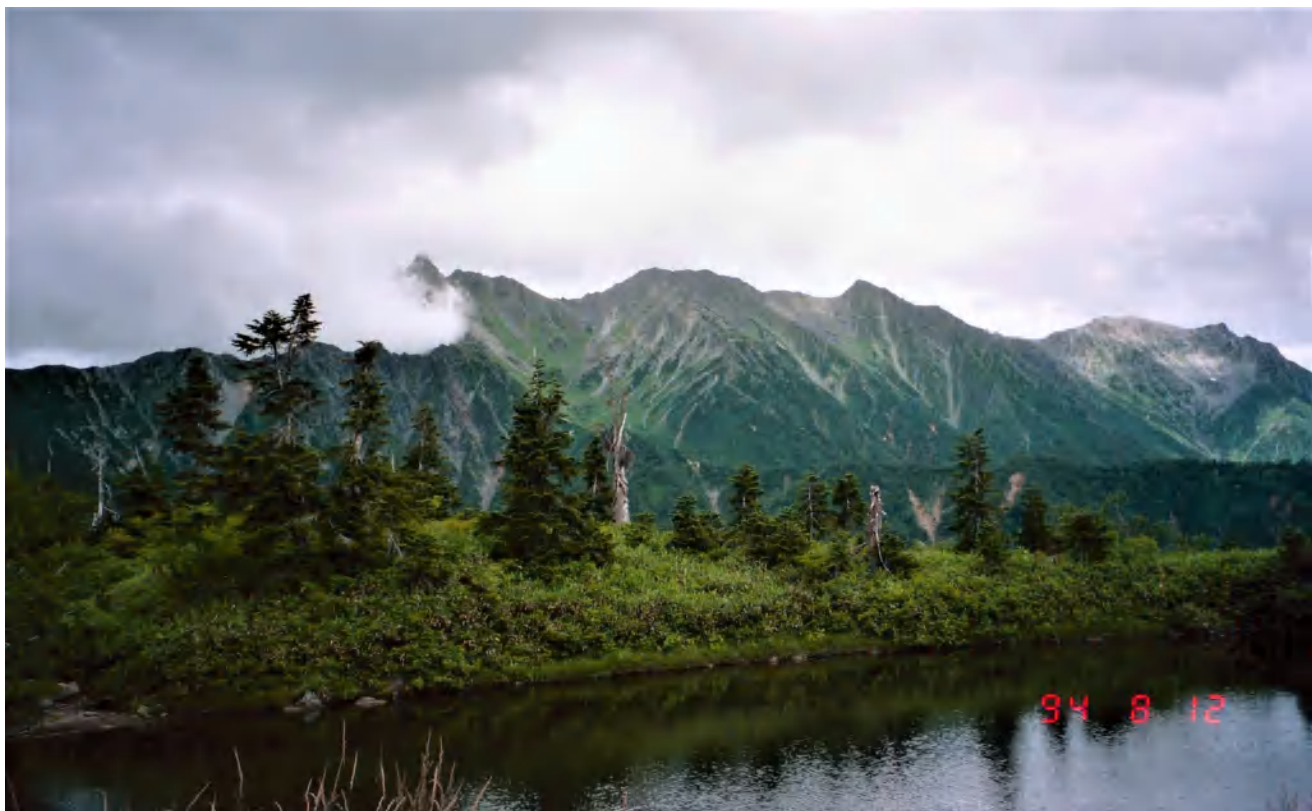
秩父沢から少し行った所でもう一度沢を渡るのだが、こちらには水はなかった。ここでついに睡魔に勝てなくなり、日陰を探し15分もうつらうつらしたのだろうか、頭もだいぶすっきりしたので出発することにする。ちょ

っとでも寝たので調子は大分良くなった。前方の視界が開け草原のピークに大きな岩が見えてきた。時間からいくとそろそろ大ノマ乗越への分岐、シシウドガ原に着いてもいい時間なのだが……。あの辺りだろうか。しかしたどり着いた岩の横にある標識を見ると、ワサビ平小屋と鏡平への指示しかなかった。

とりえず昼時なのでここでお握りを食べ、缶ビールといきたい所だが、下で買ってきたウーロン茶を飲む。辺りをちょっと歩いて見たのだが、草に覆われていて大ノマ乗越へ行くらしい道はわからなかった。

鏡平の小屋であった人に最近の地図を見せてもらって確認したら、分岐はやはり食事をした所だったが、大ノマ乗越への道はすでに廃道になっていた。

当初の予定はシシウドガ原から大ノマ乗越の途中にあるお花畑を通り、弓折岳から双六小屋まで行き、次の日またもと来た道に戻って笠ヶ岳に行こうという計画だったのだ。普通だったらこんな計画はだれも作らないだろうが、単に双六岳の頂上を踏み、出来れば無線もやりたかったということだけである。85年に鏡平から双六小屋を通り水晶岳、烏帽子岳と縦走をした時、双六岳の頂



鏡平でみた槍、穂高連峰



朝の鏡平の小屋

上は踏んでいなかったからなのである。

食事をした所から45分ほどゆるい登りを行くと、どこか見覚えのある場所に出た。小さな池のある所、鏡平の一角に登りついたのである。そこからちょっとした丘をまわり込んだとき、槍ヶ岳、穂高連峰が目に見え込んだ。そこには大きな池があり、その後方に光線の加減でちょっと黒っぽく、槍ヶ岳から穂高への稜線が見えているのだった。池のそばには座るのに良さそうな岩があったので、そこに腰掛け心行くまで槍、穂高を眺める。そして池とは反対のほうに目を転ずると弓折岳の稜線だろうか、日に輝いている所を数人の登山者が登って行くのが見えていた。

● 鏡平の小屋

鏡平山荘は池からすぐの所にあった。以前泊まった時にはなかったが、新館(?)が手前につくられており、小屋の前の広場はあんなに広がったのだろうか? 9年も前のことなのであまり記憶が確かではないようだ。

売店で待望の缶ビールを買い下の広場へ行く。昼時を過ぎているが、ほとんどのベンチは埋まっていて、昼食やおしゃべりを楽しんでいる。一番外れに空いたベンチが一つあったのでそこに腰掛け、缶ビールで一人乾杯をする。思いのほか冷えていてうまかった。

双六小屋まではまだ充分行くことの出来る時間なのだが、予定を変更して今日はここで泊まることにした。

食事は4時半頃から3交代でやるそうだ。早かったのが最初の回。空揚げだとか漬物など、細々としたものが一皿に盛られている。それにご飯と味噌汁。食事の後売店でビールを買い外に出ると、まだ辺りはそれほど暗くはなっていなかったが、槍、穂高はガスで見えなくなっていた。そして小屋の後ろに見えている山もガスがしだいに下の方へ降りてきていた。案の定6時を過ぎた頃ザーと一降りあった。

7時を過ぎていただろうか、外にいる人の話し声がいやにうるさくなったので何かなと思っていると、流れ星がたくさん見えるということらしい。今日は流れ星がたくさん見える日なのだそうで、三俣蓮華岳の頂上で望遠鏡を担ぎ上げた人もいたそうだ。私はだいたい後になってから見たため、流れ星は一つしか見ることは出来なかったが、人によっては十数個も見たという人もいた。

● 常に槍と穂高を見ながらの縦走

鏡平の朝は早かった。3時頃になるともう出発していく人がある。ほとんどが双六から三俣蓮華方面に行き、水晶が野口五郎あたりで泊まるのだろう。朝食は5時頃からだ。4時すぎには起きてしまった。外に出ると槍ヶ岳などはまだ黒く、輪郭しかわからない。

食時の後、槍や穂高を見るため、前日写真を撮った池まで行って見た。そして、弓折岳から笠ヶ岳に向かう山の稜線を振り返ると、太陽に照らされてオレンジ色に輝い

ていた。この辺では（2330メートル）日が出るまでまだだいぶ時間がかかるようで、池に映った槍ヶ岳の写真を撮ろうと思っていたがあきらめて出発することにした。

6時笠ヶ岳に向け出発。双六の分岐まではちょっと急で、日に照らされて登ることになるが、爽やかな空気の中の快適な登りだった。40分ほどで標識のある分岐に着くが、そこから下を見ると鏡平の小屋の赤い屋根と池が見えていた。弓折岳まではそれほどの登りはなく、8分ほどでそれらしい所に着いた。三角点は縦走路からちょっと右に入った所にあったが、標識も何もないので注意していないと通り過ぎてしまったかも知れない。

大ノマ乗越までは急な下りになり、下り着いたところには「シシウドガ原への道は廃道になった」という注意書きが出ていた。そこからピークを一つ越えて少し行くと、岩に「秩父平」とペンキで書かれているのを見つけた。その斜面に登りきった所は気持ちの良い草原状の所で、前方にはちょっとした雪渓があり、その雪渓の末端まで行き一休みすることにした。

2667メートルのピーク（だと思う）に登りつくと、笠ヶ岳が見えるようになったが、まだ大分先ようだ。この辺りからはそれほどのアップダウンはなく、左に槍ヶ岳、穂高連峰を見、右には笠ヶ岳への尾根筋を見ながらの稜線散歩となる。

尾根のため目立ったピークはなく、抜戸岳は巻いてし

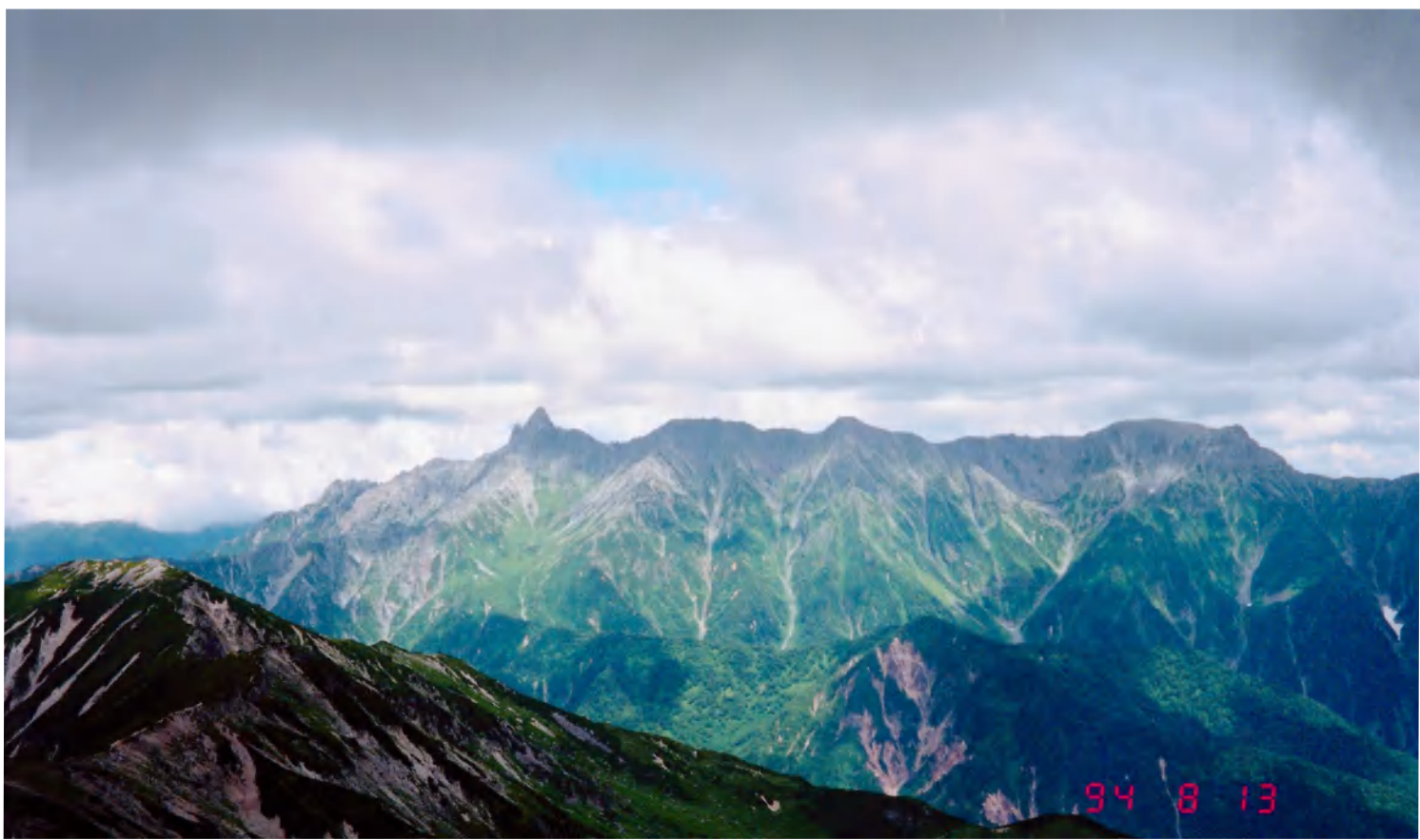
まったかと思っていると、縦走路の途中にザックを置き、上を見ている二人組に出会った。聞くところか抜戸岳への登り口だという。そこで私もそこにザックを置き、這松の中のガレ場を登ることにした。登り着いたところには三角点はなく、そこからちょっと左に行った所にケルンや三角点があり、二枚に割れていたが珍しく山名標識があった。なぜか北アルプスだというのに、弓折岳とこれから行く笠ヶ岳の頂上にも山名標識はなかった。

笠新道の分岐からは、ちょっと急な登りとなるが、所々に咲いている花を見ながら行く。この辺にはなぜかチングルマが多かった。笠新道の分岐と笠ヶ岳山荘のほぼ中間にある抜戸岩は、縦走路の横にでもあるのだろうと思っていたが、岩の中(?)を縦走路が通っている。時として自然という物は、おもしろい物を造り出すものだ。この抜戸岩もそのうちに入るだろう。ここはビバークするにはちょうどいい場所だが、笠ヶ岳山荘の手前にあるキャンプ指定地まではそこからそれほどかからなかった。

小屋まではテント場の中を通り、岩の堆積したところを登っていく。予定通り小屋には12時前に着くことが出来た。

● 笠ヶ岳で会った人達

ちょっと早いけど宿泊の申し込みをすませ、カメラなど





笠ヶ岳の山頂

を持って頂上へ向かった。小屋を出て少し行くと岩の堆積した道となり5、6分で頂上へ着く。大きなケルンの立つ頂上には誰もおらず、そこには三角点も山名表示板もなかった。周りを見回して見ると、南の方向へ少し行った所に幾つかのケルンが見えたので行ってみると、そこに三角点があった。三角点のある場所は狭く通り道にもなっているようなので、さっきの大きなケルンのある所まで戻り、適当な石の上に腰掛けて休むことにした。

ここでサブザックに入れてきたピコ6を取り出し聞いてみる。アンテナは短縮のホイップだがどうもEスポが出ているようだ。しかし、なんとか岡山県と岐阜県養老郡の局の2局と交信することができた。

今まで良く晴れていたのにいつのまにかガスができて、焼岳、穂高岳という順に隠してしまった。遠くでは雷の音も聞こえてきていたので、早々に小屋へ戻ることにした。その頃になるとだれもいなかった頂上には、10数人の人達が登ってきていた。

小屋に戻り荷物を整理してから階下へ。階段を降りたすぐの所が食事のとき以外は自由に使える。売店で缶ビールを買い近くのテーブルへ。今日の山行メモを書いておこうとメモ帳に向かってみると、「飲みませんか」とコップを差し出された。見ると頂上であった老夫婦が同じテーブルの向い側に座っていた。60代後半に見えるこの夫婦は、愛知県から来たそうで、60歳を過ぎてから山に登るようになり、山にはいつも二人で行くのだそうだ。その向かいには20歳代のアベック。男性の方は笠ヶ岳は5回目だという。私の前にいるのは私と同じ年頃の男性で、富山から車で来て早朝笠新道を登って来



頂上から焼岳を見る

たという。

少し後で話しに加わった中年の夫婦は、静岡県の清水から車できたという。子供を家において全国各地の山をあちこち登っているらしい。丹沢も車でいくと清水からはそんなに遠くはないため、主なルートは大体登っているそうだ。おもしろいことにこの夫婦は、一度行った山でも証拠写真（山名標識とか特徴のある物を入れて撮る）がないともう一度写真を撮りに登るのだそうだ。

● 本当に下るばかりの笠新道

日の出を見ようと5時前に外に出て見ると、結構たくさんの方が小屋の前にいた。中には大型のカメラを三脚に据え付けてじっと待っている人もいる。しかし、槍ヶ岳の背後の空間は大分明るくなってきてはいたが、一向に日が出て来る様子はなく、寒いこともあり日の出を見るのはあきらめて小屋に戻って行く人もいる。ふと笠ヶ岳の方を振り返ってみると、山肌は陽に照らされオレンジ色に輝いている。そして、頂上ではすでに日の出は見られたのだろう、登山者が三々五々下山して来るのが見えた。小屋の前で日の出を見られたのは、それからまだ



モルゲンロートに染
まる笠ヶ岳

ちょっと時間が経ってからだった。

5時40分。まだちょっと早いが、下で温泉に入りたかったこともあり小屋を出発する。テント場の外れから縦走路に出ると、短パンにランニングシャツそれにウエストポーチという、3000メートル近い山の中とは思えない格好をした人が下から走って登って来た。

笠新道の分岐までに2グループ追い抜く。まだちょっと肌寒いくらいだ。しかしこのコースはまだ昇りきっていない太陽が、真正面から射すためまぶしくてしょうがない。分岐につくと昨日会った清水の夫婦が休んでいた。今日は双六方面に行くらしい。

分岐から見ると下にみえる雪渓まではものすごく急で、乾燥して白っぽく見える岩は何故か脆く崩れそうに見える、降りるのを躊躇してしまった。そのため少し前に下山して行ったグループはあっという間に見えなくなってしまった。

その急な下りを降りたところにある雪渓は、水場になっているようだが、水はチョロチョロとしか出ていなかった。

ここからはそれほど急な下りはなく所々に花もみることができた。あまりはっきりしていないが、岩などにペンキで書かれた○印がある。それを確認しながら行くと、変な方向から中年のグループがやって来た。道がちょっと不明瞭になっていたこともあり、その方向に行くと「ちがう、ちがう」と手を振っていた。どうもその人達は穴毛谷の方に行ってしまったのらしい。

杓子平の分岐で笠ヶ岳とはもうお別れである。ここか

らは樹林帯の下りとなるが、時々木々の間から穂高岳を見ることが出来た。この辺までくると登って来る人とも度々会うようになる。

どのくらい歩いたのだろうか、やっと林道が見えてくるとその少し手前に水場があった。水場では中年の男性二人が顔を洗ったり水を飲んだりしていたので、素通りして林道に出たところで休むことにした。

バスターミナルに着くとまずバスの切符を買っておく。13時の急行（座席指定）高山行きである。まだ3時間近くも時間があつたので、窓口の人がロープウェイに乗るのかと聞く。乗らないと答えると、今なら別にとの便でも空いてるからという。しかしここでは温泉に入ったり、食事をしたりと結構予定があるのだ。

まだこの時間だとそれほど温泉は混んでおらず、浴槽などもきれいだった。しかし、あまり温泉のお湯という感じがしなかったが、まあ無料だからよしとしよう。村営食堂は土産物屋の二階にあり、展望食堂というらしいが、出来れば反対の方角が見えるといいのだが……。ここで玉子丼を食べ、ビールで一人乾杯をした。

◎ 山行ルート ◎

新宿（深夜バス） = 新穂高温泉 → 鏡平（鏡平小屋・泊）

鏡平 → 弓折岳 → 笠ヶ岳（笠ヶ岳山荘・泊）

笠ヶ岳 → 新穂高温泉 = 高山駅（JR高山本線）
→ 名古屋駅（新幹線） → 東京駅

不帰ノ嶮を越え白馬へ

山行日：88/08/12~16

● 扇沢から冷池小屋まで

臨時急行のアルプス 81 号は松本駅を出ると大糸線に入り、信濃大町駅に着いたのは丁度 5 時だった。バスはすぐには出る様子もないので今日はタクシーで行くことにした。五人も集まればバスと同じか少しは安くなるだろう。目的地は扇沢である。

五竜岳や白馬岳方面への登山口は扇沢の手前にあるが、食事をしてから夜行の疲れを取るためにちょっと眠りたかったため、扇沢まで行くことにしたのだ。しかし、扇沢まで来てみるとアルペンルート切符売り場にはもう長蛇の列ができていた。そのため扇沢では食事だけして登山口へ行くことにした。

扇沢の駐車場に向かうバスや自家用車が頻繁に通る道を、タクシーで通過してきた登山口まで戻る。爺ヶ岳への登山口は駐車場からちょっともどった扇沢にかかる橋のたもとにあった。

夜行で来てすぐ登るのはやはりつらい。登りながらうつらうつらすることが一度や二度ではなかった。そのため何度か休憩をとりながら登ったため、種池山荘まで三時間半もかかってしまった。しかし、種池山荘についてそのまわりのお花畑をみたとき、今までの苦勞などすっかり忘れてしまうほどそこはすばらしい所だった。ここからは天気も良く高山植物を見ながらの稜線散歩だ。

種池山荘から 40 分程で爺ヶ岳頂上に着く。頂上に着いた時には少し雲がでてきたが、それでも槍ヶ岳や穂



種池山荘付近からの展望

高、立山などを望むことができた。これからのコースは冷池乗越、冷池小屋までの約一時間強。まだ 11 時前なので時間は充分にある。ここで山々の展望を満喫してから出発。

冷池乗越まで来ると雲が消えた瞬間に冷池山荘が見えた。今日はあの小屋で泊まるのだ。

12 時ちょっとすぎには冷池小屋に着いた。小屋の前は少し高くなっていて、見晴らしがいい。ちょうどイスもあるので小屋でビールを買ってきて、雲で時々見え隠れする冷池乗越や鹿島槍方面をながめながら飲む。

● 冷池小屋から五竜岳まで

翌日の天気はまあまあだった。出発してからすぐテント場につくと、眼を見張ってしまった。少し雲がでてい

るが、あれは立山だろうか、モルゲンロートに輝き素晴らしい姿を見せている。昨日テントに泊まった人達なのだろうか、私と同じようにあたりの山々に見入っていた。いつまで見ていても見飽きないが、今日は先が長いので早々に出発しなければならない。そこからは高山植物の咲くコースを布引岳へと向かい、そこですこし休む。ここからも立山や槍、穂高、富士山などが眺められたが、冷池小屋先のテント場で見たような感動は受けなかった。

鹿島槍ヶ岳までは布引岳から約 40 分。この鹿島槍には南峰と北峰の二峰があり、北峰頂上は南峰頂上にくらべると狭く、5、6 人で一杯になってしまいそうだった。

さて、これからキレット小屋までのコースが今回の山



冷池乗越から
冷池小屋を見る





鹿島槍岳南峰頂上

行で最初の試練である。それは八峰キレットがあるからだ。しかし、大変だ大変だというガイドブックの解説とは違い、実際に歩いてみた感じではそれほどことはないようだった。しかし、ちょっとスリルはあった。

約一時間でキレット小屋に到着した。小屋の外観だけを見た感じでは下界の民宿風の建物だ。そのキレット小屋で休んでいると、五竜岳方面からの縦走の人達が着き、そして八峰キレットに向かっていく。昨日五竜山荘に泊まった人たちなのだろう、食事をして出てくると9時半頃にちょうどこのキレット小屋に着く勘定になる、そのためキレット小屋を出発したものの渋滞(?)で、しばしば立ち往生することになった。

約一時間で「口ノ沢のコル」と書かれた場所に着く。今日のコースのほぼ中間点になるようだ。その後岩場の登りや鎖場がでてくると岩にペンキで「G 5」と書いてあるところに着いた。そこから50分弱で五竜岳だった。しかし、いままで岩場にばかり気をとられていて気がつかなかったが、天気は大分曇ってきたようで、五竜岳の頂上ではガスで何も見えなかった。しかし、後は小屋までなので山頂で大休止とした。

五竜山荘まで来るとその前には大勢休んでいる人がいた。そして小屋の前のそれほど広くはないテント場には沢山のテントが張られていた。五竜岳の頂上で話をした人と小屋の前で再開したので、ビールで乾杯をした。

五竜山荘の部屋は二段になっているが、6人ぐらいならゆったり寝られそうだが、今日は混んでいるようで、

最終的には子供2人を含めて10人となった。五竜岳の頂上であった人と同室になったので、一緒にウイスキーを飲み始めると、自炊場(ちょうど私達の寝ることになる部屋の目の前にある)で夕食を作っていた同じ部屋の二人づれが、「いっしょにどうぞ」とおつまみをすすめてくれるので、そのことばに甘えることにした。飲みながら色々話をしていたので、夕食の時間が過ぎてしまい急いで食堂に行く。今日のメニューはカレーとサラダだった。

● それほどでもなかった不帰ノ嶮

眼が覚めるとまだ外は暗かったが雨の音はしなかった。時間は4時を少し回ったところだったが、玄関に出てみると天の川が良く見えていた。この様子だと午前中はもつだろう。

今日は天狗山荘までの予定なのでゆっくりとしてしまい、朝食も第二陣となってしまった。そのため急いで食事をすませ、荷物を持って玄関に出てみるとなんとまわりの山はガスで何も見えない。起きた時見たのは夢だったのだろうか。しかし今までの天気がラッキーだったと思ひ、ガスの中を最初のポイント唐松岳めざして出発することにした。

牛首岳の手前でいままでの霧雨が本降りになってしまい、雨具を着ることにした。牛首岳への分岐から約10分でガスの中に唐松岳頂上山荘が見えてきた。ここで川越の人(五竜山荘と一緒に来た人)と再会、唐松岳の頂上へ一緒に行くことにした。約5分で頂上に着いたがガ

スで何もみえない。川越の人とはここで別れ、私はいよいよ不帰の嶮へと向かう。

約1時間で「不帰ノ嶮」と表示の出ているところへ来た。それほどの難路ではなかったような気がする。トランプスしてちょっと下ったところに適当な場所があったので一息入れることにした。この後も鎖場がちょっとありスリルはあった。天狗山荘方面から来ると鎖場などが登りになるので、ちょっと大変なのだろう。

1時間程も歩いたらどうか、コルのようなところに出た。天狗の大下りの手前の最低鞍部のようだ。休んでいるとガスが晴れ、目の前に天狗の大下りを見ることができ。赤や黄色の服を着た登山者が点々と見えている。この天狗の大下り（唐松側から行くと天狗の大登りになるが）途中でまた雨にあったため、約1時間を要してしまった。登り切ったところが天狗の頭だと思っていたが、天狗の頭はそれからまだ40分程稜線をいった所だった。この途中でコマクサをたくさん見たが、天狗の頭から天狗山荘までのあいだも高山植物が多く、天気がよければゆっくりと高山植物を見ながら稜線散歩といきたいところなのだが……。

雪渓を前にしたちっちゃな小屋が見えてきた。天狗山荘である。今まで見てきた小屋の中では一番小さいのではないだろうか。しかし、その周辺には沢山の花が咲いている。予定ではここに泊まることにしていたので小屋

でビールを買って来て飲んだ。ウマイ。ビールを飲みながら考えてみるとまだ1時、急げば白馬岳までは行けるかもしれない。唐松岳から後になり先になりしてきたグループも白馬まで行くらしいので、急遽宿泊は白馬と決め出発することにした。

最近秘湯ブームで有名になった釜温泉の分岐までは、砂礫帯の下りですぐに着いた。ここにはちゃんとした指



コマクサ



上 白馬大雪渓
右 白馬岳より小屋を見る



導標が立っている。ここから今度は砂礫帯の登りとなり、30分弱で白馬鑓ヶ岳の頂上だった。今まではガスや雨でほとんど展望がきかなかったが、ここに来て初めて素晴らしい展望に恵まれた。しかし山の天気は変わりやすいと言うが、白馬鑓ヶ岳を下り始めると、今までの天気は嘘のようにまたガスが私の周りを包んでしまった。1時間もガスの中を行っただろうか、エンジンの音と人の声が風によって聞こえて来るとその瞬間ガスが消え、前方の山にへばりつくようにして建っている小屋を見ることが出来た。しかしそれも一瞬でまたガスに消さ

れてしまった。

3時40分、村宮頂上宿舎に到着した。今日は長い一日だった。

● 白馬岳頂上と白馬大雪渓

昨夜から断続的に降っていた雨は朝までは残らなかったようだ。4時頃には目を覚ましたので外を見ると雨は降っておらず、次第に赤味を帯びてきていた。泊まっている人たちは御来光を眺めに行くのだろうか、カメラ等を持って出掛けていく。私も出かけようと玄関まで行く

白馬岳から日本海を目指して

山行日：99/08/11~16

'99 8 13

北アルプスの白馬岳から日本海沿岸の親不知まで徒歩で行くルートがある。海拔3000メートルの場所から海拔0メートルまでを歩いて行くのも面白そうだなとは思っていたが、実際自分がやろうなどとは考えてもいなかった。それに予備日なども含めると一週間はかかりそうなので、日程がちょっと厳しい。しかし、雪倉岳までなら何とか行けそうで、今年は雪倉岳まで行くことにしていたが、夏休み直前になって日程の都合もつき、白馬岳から日本海沿岸の親不知へ行くことが可能になった。

◆ 蓮華温泉から白馬大池へ

出発地の蓮華温泉の駐車場から日本海までは四泊以上になるので荷物は重く、営業小屋に泊った昨年の西穂―奥穂縦走の時に比べると雲泥の差だった。

6時20分に駐車場を出発。蓮華温泉ロッジのほうへ行くと道標があり、オフロードバイクなら走れそうな九十九折りの道を登って行くと、ロッジの赤い屋根とその

先にある露天風呂へ行く道が見えていた。最近では車から往復2、3時間という登山が多く、久しぶりの大きなザックを背負っているためか、休み休み行くことになる。歩き始めはそこそこ見通しもきき明るい登りだったが、いつの間にか変化のない樹林帯の登りになっていた。

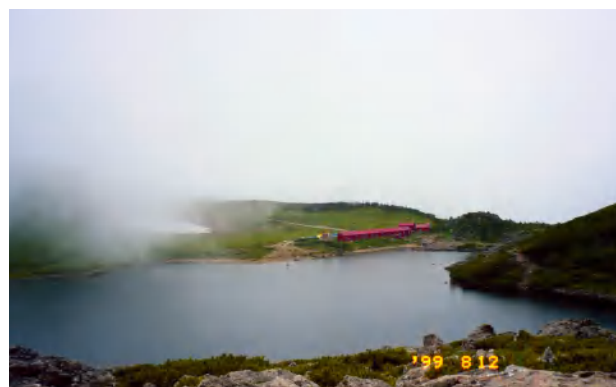
8時25分、ベンチが二つ三つ置かれた場所に出るとそこにあった標識には“天狗の庭”と書かれていた。天気が良ければ雪倉岳方面の展望もある所ようだが、ガスで視界も悪く、ここでは休まず先を急ぐことにした。

駐車場から三時間も行っただろうか、前方が明るくなって来ると木道が見えてきた。白馬大池の小屋まではもうすぐのようで、登り降りのあまりない木道を行くと、左に赤い屋根の小屋が見えてきた。木道は少し先で左右に分かれるが、先行したYさんはその分岐で休んでいた。

◆ 予定を変更、白馬大池で幕営



白馬大池の小屋とテント場



池のそばにある小屋



白馬大池の周辺の
高山植物

9時50分、白馬大池に着いたが、すでに予定時間を大幅にオーバーしていた。小蓮華山、白馬岳と通過するだけであれば今からでも充分間に合うだろうが、2ヶ所で6mを運用するとなると白馬岳のキャンプ場に到着頃には真っ暗になっているかも知れない。そこで思いついたのが白馬大池にテントを張り、無線機材だけをもって小蓮華山まで行き、無線運用をして降りてくるというものだった。そこでまだあまりテントの張られていないうちにテント場を確保しようと、白馬大池の小屋へ向かうことにした。

◆ 白馬乗鞍岳へ遊びに

テントを張り荷物を整理していると雨が降りだしたので、あわてて荷物をテントの中に放り込む。通り雨だろうと思っていたが結構激しく降ってきたため、出鼻を挫かれた格好になり、小蓮華山へ行くのは敢えなく中止となった。しかし時間はまだタプブリあるので、池の反対側にある乗鞍岳（白馬）まで行ってみることにした。

乗鞍岳への登山道は岩の積み重なった所もあって歩きにくかったが、大体はゆるい登りなので楽だった。ちょうど池が見下ろせる所へ出たので一息入れることにした。そこからさらに登って行くと前に大きなケルンが見



えてきた。そのケルンは2、3mはあるだろうか、セメントで固められていてちょっとやそつとでは崩れそうにない。その横に“乗鞍岳山頂”と書かれた山名標識も立っていたが、三角点は見当たらなかった。山名標識や立派な(?)ケルンがあるのだからその辺に三角点はあるだろうと探したが見つからず、ケルンの横にあった大岩の上に腰かけて休むことにした。ちょうどそこへ“グリーンパトロール”の腕章をした若い男女がやって来たので、乗鞍岳の“三角点”は何処にあるのかと女の子に聞いてみたが、“三角点”自体を知らなかった。

◆ 雨の一夜

白馬大池まで戻って来ると、小屋の前にはだいぶテン



ブロッケンを見る

トの数も増えていた。テントサイトは小屋と池と草原に囲まれた所にあり、雨上がりの草の色が綺麗だったので、カメラを持って池や蓮華温泉からの登山道の分岐辺りで写真を撮ることにした。月山に行った時にずっと山行を一緒にしてきたカメラが故障してしまい、前回行った蔵王では“レンズ付きフィルム”を使ったが、急遽(?)コンパクトカメラを購入して今回新しいカメラを持って来たのだが、やはり高山植物の写真を撮るにはコンパクトカメラでは無理があるようだ。

米を炊く頃になってまた雨が降って来たのでテントの中に逃げこんだが、かなり強く降り、その後雨は断続的に降り続いた。

◆ ブロッケンを見ながら小蓮華山へ

雨の音はしなかったのでテントを出ると天気は良く、今日一日良さそうだ。

テントからも見えていた小蓮華山方面への登山道は、小石を敷き詰めたような道で歩きにくかった。左を見ると草原を前景に白馬大池と小屋が、時々流れてくるガスで見え隠れしているが、天気は快方に向かっているように思われた。出発してから40分ほど行った2つ目のピークを降りかけた時、前を歩いていたYさんが「あれ、あれ」という。その方向を見ると雲海になった所に太陽の輪が映っていた。それは久しぶりに見るブロッケンだった。

消えないうちにと写真を撮ってからまた歩きだしたが、2、30mほどの間右手の雲海には日輪を背負って歩く自分の姿が映っていた。ブロッケンも剣岳や荒川前岳でも見ているが、これほど長時間はっきりと見えていたことは未だ曾てなかった。

6時30分、ちょっと急な登りがある手前で一息入れることにしたが、休んでいる間にも何人もの登山者が通過して行った。そこでは10分ばかり休んでから腰を上げる。その頃になると陽はだいぶ高くなってきていたが思ったよりも涼しい。前方にガスで見え隠れするピーク

に沢山の人がいるのが見えてきたが、あれが小蓮華山だろうか。そのピークの手前きた時偶然にもガスが流れ、そこに素晴らしい景色を見ることが出来た。

◆ 今回の山行で最初で最後の雄大な眺め

一瞬見とれてしまったが白馬岳、杓子岳、鍵ヶ岳だろうか、それは雄大な眺めだった。早いスピードでガスが流れているので、急いで写真を撮ってから小蓮華山の山頂へと向かった。

先着していたYさんはピークから少し東へ寄った所で運用の準備に取り掛かっていた。今回持ってきている運用装備は、ヘンテナとTR9300それにHL66V。

Yさんから“新潟県糸魚川市 小蓮華山山頂”移動の運用を開始。しかし時間が早いせいかあまり応答は良くない。天気良ければ写真を撮ったりして過ごす事ができるが、あたりはまたガスが流れてきて展望を閉ざしてしまっていた。そこで430MHzのトランシーバーで、応答する人などいないだろうと思いつつも“ヤマランメンバー”を呼んでみると、なんとすぐにJ13NXS局から応答がありビックリ。鉢ヶ岳の山頂手前を登っている所だとかで、荒い息づかいが伝わってきた。そこで山頂についてからもう一度呼んでもらう事にして一旦閉局した。

数分後コールがありQSOしたが、昨日乗鞍岳でも運用したそうで、時間を聞くと我々が白馬大池でテントを

張っていた頃のような。そしてこれから朝日岳に向かう予定だという。

小蓮華山の山頂付近は相変わらずガスに覆われたり、一瞬そのガスが流れると前には雄大な白馬周辺の山々が見えたりする。しかし時々雨粒も落ちてくるようになり、9時10分にはガスに包まれた山頂を出発することにした

◆ 三国境に荷物をデポして白馬岳へ

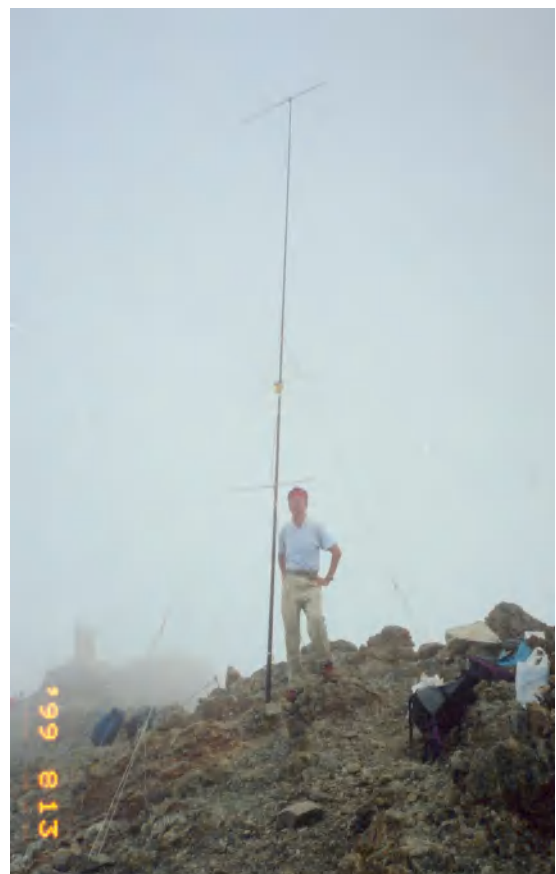
ガスの中岩屑の登山道を下って行くと、頑丈そうな拳大の岩で囲まれた場所があり、何だろうと見るとそこにはコマクサが2、3株植わっていて、ピンク色の小さな花が風に必至に耐えていた。

9時42分、案外と早く三国境に着いたが、ここで白馬大池で隣りにテントを張っていた人たちに再会した。彼らはここに荷物をデポして白馬岳を往復するのだと言う。最初我々は白馬岳まで全部の荷物を担いで行く予定だったが、またここに戻ってくるので、運用機材以外の荷物は三国境にデポして白馬岳へ向かうことにした。

三国境からの道は白い砂礫のような道だった。ほとんど



小蓮華山の山頂



小蓮華山の山頂にヘンテナを上げる

ど空身同然だから周囲の景色や道端に咲く高山植物を鑑賞する余裕もある。一つピークを越えると見晴の良い所だったが、そこからは雪倉岳方面の山々が見える。前方に人の沢山いるピークが見えてきたが白馬岳にしてはちょっと時間的に早すぎるし、もっと人がいるだろうと思いつながらも行くと、そこは見覚えのある場所だった。

◆ 雷鳥に出会った白馬岳

10時30分、12年ぶりの白馬岳の山頂だった。しかし残念ながらガスで展望はあまりないのですぐに無線運用の準備に取りかかり、Yさんから運用開始。私は11時40分から“北安曇郡白馬（はくば）村 白馬（しろま）岳”移動のCQを出した。標高は3000m近くあるが、やはり高さだけではだめなようと思ったほど局数は出来なかったが、雲ノ平に入っていたJ I T L L局が呼んできてくれた。明日は水晶から読売新道を黒部湖の予定だという。

Yさんはもう一度CQを出してみるというので、その間に白馬山荘まで水を取りに行くことにした。急ぎ足で小屋まで下ったのだが水がどこにあるのかが判らず、“受付”と書いてあった小屋に入り（ここには3棟くらいの建物があつた）聞くと、「この小屋のはずれにトイレ

があるがその前にある」と言う。男の従業員は「飲料用ですから平気ですよ」と付け加えた。

ここの水は雪渓の水なのか、それとも沢からポンプアップしているのかは判らないが、手が切れるように冷たい水だった。水を補給し小屋を出ると、向かい側の建物には“雲上レストラン”という看板が出ていて、その前にビールの自販機が置かれていた。これは良いやと思つたが、残念ながらお金は三国境にデポしたザックの中に置いてきてしまつていた。

後髪引かれる思いで頂上への道を登って行くと、途中で何人も人が立ち止まってカメラを出している。なにかと思ひ近くに行つた時良く見ると、カメラの先には雷鳥の親子がちょこちょこ歩いていたのだった。雷鳥に出会うと天気が悪くなるという迷信があるのであまり良くはないのだが・・・。

◆ ぐっと人の少なくなる雪倉岳への道

13時、白馬岳の山頂を出発する。ほとんど空身同然なので下りは早く、あっという間に三国境まで戻って来ることが出来た。ここでちょっと菓子などを食べてから雪倉岳へ向け出発する。出発直前に2、30人の団体が小蓮華山方面から着いたがツアーだろうか。まさか雪倉



白馬岳から雪倉岳への稜線

岳までは行かないだろう。ガイドブックではここからは人のあまり行かない領域になると書かれている。

山腹をトラバースするようについた細かい砂利の歩きにくい道を下って行くと対向者がやってきた。すれ違いの出来ない所だったので待っていると「どの位で三国境か」と言う。そこでもうすぐですよと言ったが、かなり疲れているようで雪倉岳からでも来たのだろうか。さらに下って行くと傾斜もゆるくなり左に小さな池が見えてきた。前から来る3人のグループに見覚えがあったので何処であったのかかと思っていると、白馬乗鞍であったグリーンパトロールの人達だった。

三国境から25分ほどで蓮華温泉への分岐を過ぎるが、ここからは今までとは違って木が多くなる。左手の山肌にはまだ雪が残っているようでその末端が登山道近くまで迫り出してきている。その傍らで一息入れることにしてザックを降ろした。見ると右下に続く雪渓には人影があり、水を汲んでいるようで、上がってきたその人に聞くとちよろちよろとだが水が得られると言う。そこでコップを持って行ってみると本当にちよろちよろとしか出ていないが、冷たくて美味しい水だった。

ここからはそれほど急な登降は無く、登山道の周りにはハイマツやお花畑なども見られる。二つ三つ雪渓を越えて行くと登山道の区別もつかないような広い所へ出た。目印になるものもあまりないが、時々道標が出てくる。これがないとガスの中だと迷ってしまうだろう。

15時5分、雪倉岳避難小屋に着いた。ちょうど白馬大池で隣りにテントを張っていた人が出て来たので、「混んでいますか」と聞くと「2名予約してあります



雪倉岳避難小屋

よ」といって笑っていた。まだ時間は早かったので、3人のグループと雪渓で水を汲んでいた単独行の人の4人が小屋にいただけだった。

◆ リニューアルされていた雪倉岳避難小屋

雪倉岳避難小屋には泊まる予定ではなかったのですが何も調べていなかったが、小屋に着いてみるとまだ新しいようで、昨年の10月にリニューアルされたらしい。小屋にはないだろうとわざわざ白馬から水を持っていったのだが、途中で休んだ雪渓や避難小屋の裏にも雪渓がまだ残っていて、ここでも水が確保できるようだ。

小屋で一息入れていると天気も良くなり、陽も差してきたので、昨日の雨で濡れたテントや寝袋を小屋の外で干すことにした。しかし10分もたたないうちにまた雨が降り出してきてしまった。

時間はまだ早い雨が降っているため外には出られず、仕方がないので夕食の準備をすることにした。もともと“お湯ぽちゃ”だからあつという間に出来てしまった。3人のグループは五平餅や焼肉を焼いているようで、何やらいい匂いをさせている。こちらの食事が終わる頃になって、二人連れが到着して今日この小屋に泊まるのは10人になった。夜になると風と雨が強くなり頑丈そうな小屋も風で揺れていたが、小屋の外で幕営していたグループはついに小屋に避難してはこなかった。

◆ ガスの中を雪倉岳へ

朝起きると雨は降っていないようだがガスっている。とりえず朝食を食べ出発の準備をととのえるが、小屋に泊まった他の人達は誰一人として起きてはこなかった。

5時10分。まだ誰も出発しないなか（外にテントを張っていたグループはすでに出発していたが）、雪倉岳への登りにかかった。ハイマツや高山植物の咲く斜面を縫うように付けられた道を登って行くと、登山道を雷鳥がちょこちょこ歩いていた。ちょっと小柄だから子供だろうか。その後天候はさらに悪化、途中で雨具を着ることになるが、やはり雷鳥に会うと天気が悪くなるという諺の通りになってしまった。

小屋から35分、ガスではっきりしないが小広い場所

についた。視界は数メートルでそこからの展望はまるでない。三角点と山名を刻んだ石があったので、ここが雪倉岳の山頂になるようだ。

ここでの運用はあまり気が進まないが、ここまで来たのだから準備に取り掛かる。雪倉岳の山頂はかなり広いので八木アンテナでも上げられそうだが、今回はヘンテナ。しかしかなり風が強ク吹いていて、運用中に何度も倒れかかってしまった。

私は6時40分から6mを運用したが、その頃には雨もだいぶ強くなってきて、いつもの青いビニールシート

にもぐつての運用となった。ちょうどこの時10数人の高校生のグループが山頂に到着したところだったが、彼らの目にはなんと映っただろうか。

◆ 天候悪化の中を朝日岳へ

天候は好転しないため、Yさんは朝日岳方面へはあまり行きたくはない様子だった。しかし、宿泊場所の事を考えると朝日岳まで行き、五輪尾根を蓮華温泉へ下るしか方法はないだろう。そこでガスで数メートルも先が見えない中を、朝日小屋を目指して出発することにした。

雪倉岳の山頂を出発すると降り続いた。どのくらい降っただろうか、一瞬ガスが流れるとそこには緑色の山肌と雪が白く斑についた風景があった。さらに降って行くと雪渓があり、その傍らで一息入れることにした。地図を見るとこの辺りからは登降はあまりなくなるようで、赤男山を巻いて行くと小桜ガ原に出るようだ。

30分ほど行くとガレ場に出るが、一カ所左側がかなり下までガレている所があり、岩が濡れているため慎重に行く。ちょうど右手の小高くなった所に標識があったので見に行くところ“ツバメ岩”と書かれていた。

小さな登降を繰り返していくとガスの中に木道が見えてきた。一旦降って小さな沢を渡ると木道が続いているが、そこには誰も歩いている人はおらず、ガスでポート見えるからか幻想的な雰囲気を漂わせている。ここからが小桜ガ原になるようだ。

小桜ガ原の中の木道を抜ける



朝日岳の山頂



朝日岳山頂の木道



朝日小屋

と、10時10分、珍しく登山者の休んでいるのに出会った。そこが朝日岳への分岐だったが、その登山者は我々と同じように親不知まで行くようで、今日は朝日岳はパスして白馬水平道を朝日小屋だという。私も最初は水平道へと思ったが、Yさんは朝日岳に登ってから小屋へ行こうという。もっともガイドブックを見た限りでは名前は水平道でも水平ではないらしく、朝日岳を越したほうが楽なように書かれていた。

分岐では5分ほど休んだだけで出発。分岐にある標識のすぐ横から急な登りが始まった。階段状の急な登りを行くとグングンと高度を稼いでいき、背後の展望が開けてきた。さらに登っていくと右手の展望も開けてきたが、登るにつれ風も強くなり雨も降り出してきた。前にこんもりとしたピークが見えてきたがかなり風が強い。吹き飛ばされそうになるのを必死に進むと木道が現われた。すぐにも頂上かと思ったがまだまだのようで、木道を結構歩くことになる。しかしここは天気が良いければ素晴らしい所だろう。

11時20分。誰もいない朝日岳の山頂に着いたが、ガスで何も見えず、おまけに雨が強く吹きつけてくるので、証拠写真を撮っただけで朝日小屋へ向かうことにした。雨と風の吹く山頂を後に下り始めてから5、6分も行ったかどうか、一瞬ガスが流れると、木々の間から緑の中に赤い三角屋根が見えた。あそこが朝日小屋のようで10分も行けば着くだろう。

幅の広がった道を降って行くと左に小沢があり、小屋の水源になっているのか黒いホースが数本ひかれてい

る。右からの小沢を渡りさらに行くと木道が始まりすぐ左から白馬水平道が合流した。

◆ 久しぶりの営業小屋泊まり——朝日小屋

12時10分。まだ時間が早いからか朝日小屋の前のテント場にはテントは無く、閑散としていた。小屋の入口を見ると“今日は畳1枚に一人です”という貼り紙が張られていたが、見る人によっては混雑しているともとれるし、空いているともとれる表現だ。

我々はテントを持ってきているが、この貼り紙に誘われて今日は朝日小屋に泊まることにした。

料金は素泊まりで5000円。炊事は玄関に入った左のところに水道があるのでそこでやってくれという。また一般客の食事が終わった後なら食堂も使ってよいという。部屋は玄関に入ったすぐのところであまり空いていた。

部屋のほうは確かに畳1枚に一人のようで、北アルプスもこの辺まで来ればやはり空いているのだろうか。ただ事故があったようですぐとなりの部屋（布団部屋のようだったが）にけが人が収容されたようで、事情聴取をしている声や遭対協への電話連絡の声などが聞こえていた。

◆ 朝日岳山頂はまたもやガスに覆われていた

小屋の外に出ると雨は降っていないがガスっていて、小屋の向かい側にある冬期小屋もはっきりとは見えなかった。昨日降ってきたのと同じ道を登って行くのだが、昨日に比べると快調だった。3グループばかりを追い抜き、6時15分、朝日岳の山頂に到着したが、案の定山頂からの展望はなかった。天気はあまり良くはなかったが、多少持ちそうなのでここで今回の山行で最後の無線運用することにした。

アンテナは三角点より少し北によった所に上げた。もう少し離れたほうがよかったが、“植生保護のため立入禁止”と書かれた標識があるので致し方ない。朝日岳の山頂は割合に広いのだが、登山者の歩ける場所は限られ

ている。

天気の方は時々ガスが切れまわりの山々が見えるようになったが、この辺の山は馴染みがないので良く分からない。展望盤があったので実際の風景と見比べて劔岳や毛勝山といった山は確認できた。

標高が低いことやまわりに高い山があることなどで電波の飛びはまいち良くはなかったが、古志郡の山から出ていたJ S 1 M L Q局にも呼んでもらった。

◆ 雨の中、スッテンコロリン、木道歩き

9時17分、またガスが出てきて視界の悪くなったなかを朝日岳の山頂を後にした。蓮華温泉への分岐に入り少し降って行くと、ガスで良く分からなかったが登山道の右側には雪渓があるようで、冷たい風が吹いてくる。

9時35分、栂海新道への分岐に着いた。天候さえ良ければこの分岐を日本海へ向かって行くはずだったが、今回は諦めることになった。Yさんは記念にといって一歩栂海新道へ足を踏み入れていた。赤ペンキで書かれた“日本海へ”という文字を横目で見ると蓮華温泉方面への道に入ると右へまわり込んで降って行く。少し行くと雪渓末端から流れ出た水が登山道を濡らしていて、左の斜面を見ると一面に黄色い花が咲き、まさに黄色い絨毯を敷いたようだった。

そこから少し登って行くと登山道は沢に沿って降るようになり、一部沢の中を行く所もある。所どころに木道があるが、木の表面が乾燥していれば問題はないのだろうが、雨で濡れているため厄介だ。これからこの木道に苦しめられることになる。

先を行くYさんはかなり飛ばしているようで姿は見えない。滑りやすい木道もいつの間にか樹林帯の降りになるが、雨はだいぶ激しくなってきた。登山道の途中で雨宿りしているYさんを見つけ、木の下に入り休むことにした。

地図を見るともうそろそろ橋があるのだが、まずはそれを目指した。水音が聞こえてくると12時川原に降り着いた。ここが白高地沢になるのだろうか、川の水はかなり増水しているようで橋がなければ渡れそうにない。岩にペンキで書かれた矢印に導かれて行くと仮橋がかかっていた。対岸に渡った所でちょうど時間も昼なのでそ

こで昼食にすることにした。

13時15分出発。登山道は沢を渡るとまた山の中に入る。40分ほどで瀬戸川にかかった橋を渡るが、この橋もやはり流失したようで、Yさんの持っていた昭文社の地図には“鉄橋流失”と書かれていた。しかし今年に入ってから作られたのだろう、立派で頑丈そうな鉄橋が架けられていた。川面まで10m以上は距離があるだろうか、下を見るとミルクコーヒーのような色をした濁流が渦巻きちょっとおっかなかった。

橋を過ぎるとまた急登になり、やっと木道が出てきたので“アヤメ平”かと思い一息入れることにしたが、“アヤメ平”はまだ先だった。さらに木道を行くと14時40分“兵馬の平”を通過する。今の時期は花は何もなくてただ青い草生えているだけだった。

“姫背負峠”への標識を見てゆるい傾斜の階段状の登山道を行くと右に建物が見えてきたが、蓮華温泉のキャンプ場ようだ。このあたりからまた雨が降りだしてきたが、雨具を出すのも面倒なのでそのまま行くと、キャンプ場から5分ばかりで4日前に出発した蓮華温泉ロッジが見えてきた。

駐車場に着いたのは15時30分。その頃雨は土砂降りになっていた。

◎ 山行ルート ◎

- 8/11 新小岩=中央道 蓮華温泉(駐車場)
【仮眠】
- 8/12 蓮華温泉→天狗の庭→白馬大池→
乗鞍岳→白馬大池【泊】
- 8/13 白馬大池→小蓮華山→三国境→
白馬岳→三国境→雪倉岳避難小屋【泊】
- 8/14 避難小屋→雪倉岳→小桜ガ原→
朝日岳→朝日小屋【泊】
- 8/15 朝日小屋→朝日岳→栂海新道分岐→
五輪高原→蓮華温泉
=白馬村【仮眠】
- 8/16 白馬村=東京へ

大日連峰からの劔岳

山行日：89/09/14~17

■ 初めて深夜バスを使う

9月に行く山は早くから決まっていた。と言うのは9月15日が「敬老の日」、16日が土曜日、そして17日が日曜日ということで、休みの日が早くから決まっていたことにもよる。そして、休みをフルに使えば夜行で行き二泊する山行が可能のため、何年か前の5月に近くまで行って諦めた劔岳に行ってみることにしたのである。

指定券の発売は一ヶ月前。しかしちょうど夏の山行と重なってしまうため、行きと帰りの列車の指定席の予約を、旅行代理店をやっている友人に頼むことにした。しかし、山行から帰って来ると、帰りの指定券はとれたが行きがとれなかったという。そのため新幹線で新潟まで行き、そこから北陸本線に乗り換えるという方法も考えてみたが、その日のうちに大日小屋まで行くにはちょっと無理がありそうだった。しかし、新宿から室堂行きの直通バスがあることがわかり、行きに初めてバスを使ってみることにした。

私の乗る「立山・室堂」コースは横浜始発なので、バスが来るまでちょっと待たされ、新宿を出たのは22時20分だった。出発してからすぐ渋滞に巻き込まれ、一寸走っては止まり、また一寸走っては止まりという超ノロノロ運転で、本当に予定通り着くのか心配だったがいつものまにか寝てしまったらしく、目を覚ました時は真っ暗な高速道路を快調に飛ばしていた。

日本海側を走っている北陸自動車道を寺田(?)でおりると立山市外へと向かった。

■ 寄らないつもりで称名滝へ

新宿発の深夜バスは、立山にはほぼ定刻に到着した。



行く予定はなかった称名滝

立山駅は富山地鉄立山線、美女平へ行く立山ケーブル、そして私がこれから行こうとしている称名滝などへのバスの起点になっている。バスは 7 時 45 分に発車すると称名川にかかる橋を渡りかなりの勾配を登っていく。少し行くとバスの進行方向前方に滝が見えてきた。

バス停からかなり急な坂を登っていくと 13 分ほどで大日岳への登山口へ着いたが、そこには先に登って行った登山者のだろう、ザックが一つ置かれていた。多分滝を見に行ったのだろう。私の予定では滝は見ないですぐ山に入るつもりだったが、またいつここに来られるかわからないので滝を見に行くことにした。登山口から滝見台まではほんのちょっとだった。

称名滝とネハンの滝は同じ滝壺に落ちているが、滝見台からはネハンの滝は岩に隠れているため、二つの滝を同時に見ることは出来ない。そのため二つの滝を一枚の写真の中に入れるためには、滝見台に行く手前の橋の上から撮るしかないようだ。

■ いい天気なのでついつい昼寝を

大日岳への標識にしたがって山に取りつくとぐんぐんと高度を稼いでいく。前日に雨でも降ったのか、木の葉が濡れていてズボンを濡らしてしまった。“猿が馬場”という標識のある少し手前でガスがきれ陽がでてきた。そのため樹林帯の中を歩いていた時はよかったが、“牛の首”を過ぎたあたりから大日平山荘までは、ちょっと暑いコースだった。

7 月の巻機山や 8 月の雲の平もそうだったが、大日平山荘の手前にも木道が引かれていた。その木道の端に腰かけて昼食にすることにした。昼食はパンとコーヒー牛乳。しかし、疲れているためにパンが喉を通らない。ふと小屋の窓を見るとそこには“冷たいビール有ります”という文字が書かれていた。まだ先があるので迷ったが、“冷たいビール”という誘惑には勝てなかった。

夜行の疲れとビールの酔いがまわったのか、少し木道の上で寝込んでしまった。どのくらい寝ていたのかわからないが、何か冷たいものが顔に当たるので目を覚ました。さっきまでガスはでていたが、暑いくらいに日が照っていたのだが、いつのまにか雨が降り出していたのだ。山の天気は変わりやすいとは良く言ったものだ。

ここから大日小屋まで雨が降ったりやんだりという天候だった。

■ 大日小屋の手前でついに本降りに

大日小屋への道は、大日平山荘の前を通りすぎるとややカーブしながら行くと、岩の重なった道は樹林帯になり高度が増していく。そんなルートを少し行った頃、耳を澄ますと水の音がしているのに気がついた。地図を見ると大日平小屋と大日小屋のほぼ中間に水場のマークがあった。もう半分も来たのかと思っていると、道は沢を横切りその沢に沿って登っていく。徒渉点には先客がいたので少し登ったところで休むことにした。

徒渉点から 30 分ほど沢沿いに登り、沢を渡ったところに“最後の水場”という表示があった。いつもなら別に補給などしないのだが、今回だけはここで水を補給していくことにした（大日小屋には水はなかったので、助かった）。大日平小屋からこの最後の水場まで、合計四回ほど沢を渡ったことになる。

“最後の水場”から少しいくと“あと 600 秒”という標識があった。今までは真っ直ぐ登っていたようだがこの辺からトラバースするようになり、ガスの中に右と左を示している標識が見えてきた時、今まで降ったりやんだりしていた雨は待っていましたとばかりに本降りになった。標識のところまで行くと、前の斜面には雪がまだ残っていた。そして、標識には“左・大日岳、右・大日小屋”と書いてあり、そこから少し登ると小屋の前に出た。大日小屋はこじんまりとした小屋だった。

■ ランプの下で夜遅くまで

小屋に入りひとまず宿泊の申込みをする。その時「食堂にお茶がありますから」と言っていたので、お茶を飲み食堂に行くとそこには 10 人ほどの人がいたのだろうか、小屋の人を囲んで話をしていたが、外では断続的に雨が降り続き、遠くでは雷も鳴っていた。

時間も大分遅くなり、気がついてみるとこの小屋では発電機を使っておらず、ランプを使っている。そういえば、ガイドブックに“ランプの宿”などと書いてあったことを思い出した。食事のあとランプの下で、十時頃まで話をしていた。下山する人、これから室堂方面に行く



新室堂乗越より室堂を見下ろす

人などバラバラだが、早朝に出発という人が少ないため、天気が良くないため日の出は見られないからだろう。小屋の人の話では、日の出、日没どちらも素晴らしいとのこと。機会があればもう一度来てみたい。この日この小屋に泊まったのは18人だった。

■ ガスで展望のない大日連峰の縦走

食事は6時頃から。その間にも今日の天気の話になる。昨日、大日平で一緒になった会津の六人パーティーが、大日岳に行くというので、予定にはなかったが私も大日岳に登ることにして、小屋の外に出てみると細かい雨が降っていた。大日岳へは昨日登ってきた道を分岐まで戻り、大日平への道と直角にハイ松の中の道に入っていく。それほど急な登りはなく10分ぐらい行くと、石をちょっと積み重ねたところに着いた。そこには“大日岳”と書いた標識が立っており、見覚えのある三角点標石があった。何か呆気なく着いてしまったようだ。

小屋に戻り、小屋番の青年に挨拶をして出発。小屋番の青年はわざわざ外まで出てきてくれて、空を見ながら、「平気ですよ、きっと晴れますから」と霧雨の中を送ってくれた。大日小屋から今日室堂方面に向かったの

は三人。共に単独行の人達だった。

小屋からすぐ登りで、雨の中の岩登りは多少手間取ったが、中大日は知らない間に通り過ぎてしまった。しかし、展望は望めないが変化のある道で気が紛れた。奥大日の手前まではそれほどのアルバイトはなかった。しかし所々雨のために池のようになっている所もある。昨日夕食の時、小屋番の人が言っていたトラバースルートを登ると奥大日だった。奥大日に着いた時にはガスで何も見えなかったが、時々ガスの切れ間から早月尾根が見えた。

奥大日を出発してから40分程行った辺りだろうか、前方に小屋が見えてきた。ちょうどその少し上にガスがかかっているが、多分あれが室堂になるのだろう。以前5月に来た時は、雪で覆われていたためだろうが今とはまるで様子が違って見える。そんな室堂を上から見おろしながら行くと下からの登山道と合流するところに着いた。

多分そこが新室堂乗越になるのだろう。ちょうど11時。少し早いが昼食にする。小屋で作ってもらった弁当は、いまだき珍しい竹の皮に包んだおにぎりが二つだった。

地図によると、ここから劔御前小屋まではずっと登りになる。一時間ちょっとで見覚えのある小屋がガスの中にあられた。劔御前小屋である。予定より大分早く着いたようだ。かなり風が強く吹いているので、建物の影で少し休むことにする。四年前の5月、真っ白に雪を被った劔岳を目前にして退却したが、その劔岳にこれから登るのだ。四年前とは違い今日はガスで劔岳は見えないのが残念だ。

12時45分劔山荘を目指して出発した。

■ 劔山荘では山を見ながら風呂へ

小屋に着いたのは2時少し前だった。今頃の時間に着く人などはいないのだろう、小屋の人はのんびりしていた。案内された部屋は二階の突き当たりだった。部屋には誰も居らず、劔岳にでも行っている人のだろう、ザックが二つ置いてあるだけだった。部屋は八畳ほどの広さで、入口のドアを入ると正面に窓が一つあり、左右は壁になっている。その二重になった窓から外を見ると目の前には大きな貯水槽があり、何本もの黒いホースが伸びていた。しかしそれ以外はガスで何も見えなかった。

4時頃だろうか、小屋の人が風呂に入ってくださいとやってきた。こんな山の中でと一瞬思ったが、雪渓があるから水は豊富にあるのだろう。昨日泊まった大日小屋とは大違いだ。

ここの風呂は何で沸かしているのか、発電機の置いてある近くらしく、エンジンの音が少々うるさい。たしか以前行ったことのある、赤岳鉱泉もこのような感じだった。しかし風呂場の一方の壁には窓があり、どこの山になるのか、日没前の太陽に照らされた、そんな山を見ながら風呂にはいった。

■ オコジョやブロッケン、そして岩登り

天気が心配でトイレに行った時窓から外を見ると、山の輪郭が月に照らされているのか良く見えた。昨日と違い天気は良さそうだ。

4時半に起床。昨日寝る前にサブザックに荷物を入れておいたので、弁当とサブザックを持って玄関へ行く。玄関を入った右側の土間にテーブルが置いてあるので、そこで弁当を食べることにした。満月に近い月のため外

は割合明るい、建物の中までは月の光りは射し込まない。身支度をして外へ出ると東の空が明るくなってきていた。

一服劔まで20分。ここで一休み。ここで先に出発した人に会う。この人は同室だった人で、昨日はガスで写真が撮れなかったのでまた登ってきたとのこと。一服劔で休んでいるとちょうど日の出となった。前には前劔そしてちょっと隠れるようにして劔岳が見える。以前劔御前小屋の前から見たのとはまるで違う山のような。何時まで見ても見飽きないが、出発する。一服劔からは最初ちょっと下りとなるが、またすぐ登りっぱなしとなる。

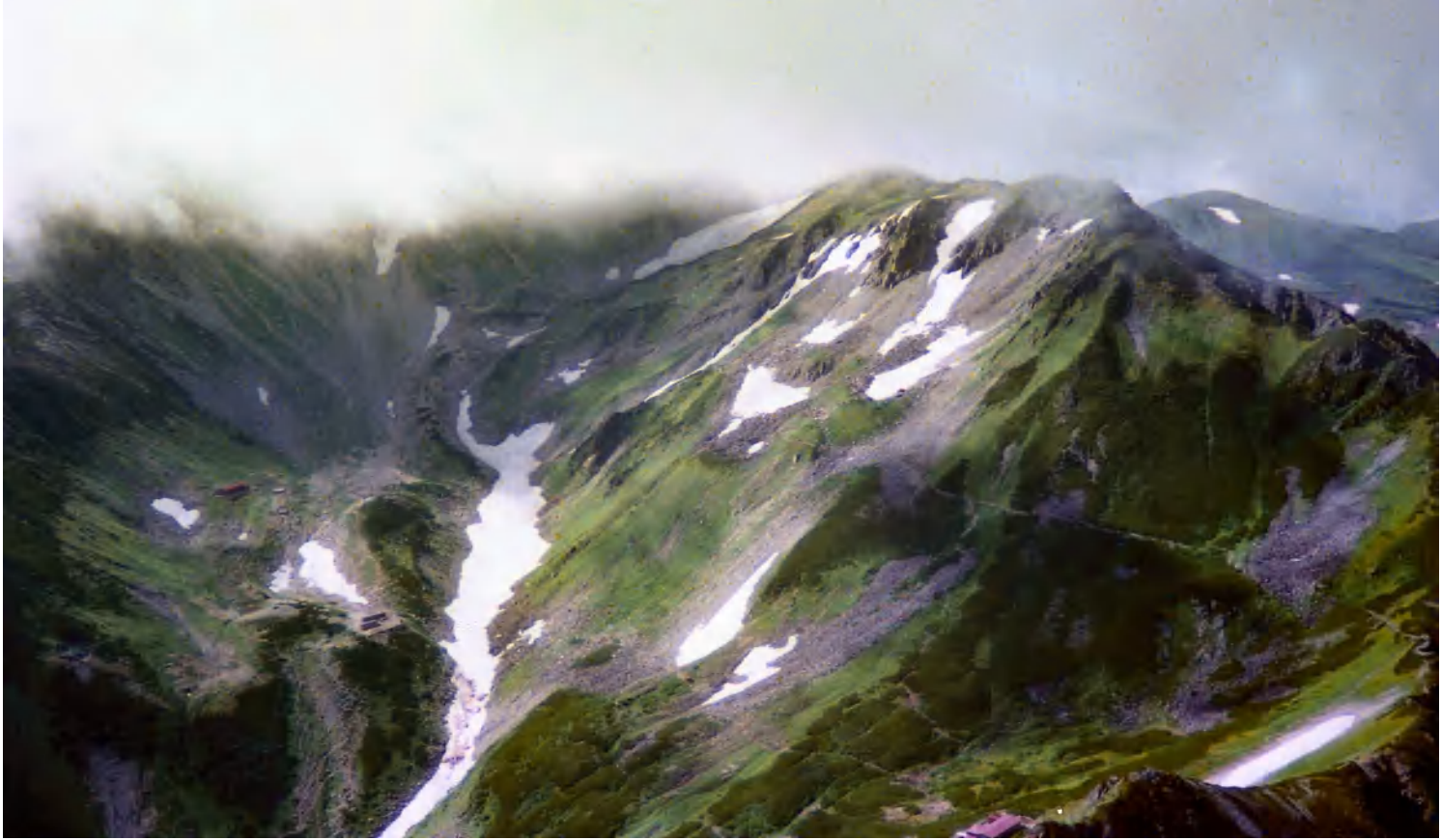
前劔には6時24分。着いた時は日本海から劔岳そして後立山方面の山々がよく見えていたため、写真を撮ろうと思ったらしいのまにかあたり一面ガスでなにも見えなくなっていた。しかしふと雲海の方を見るとブロッケンが見えていた。それも二重の輪のブロッケンだった。

前劔を出発するとまた大分下る。そこでこの山行で最初の鎖場に出た。この鎖場を過ぎ少し行ったところに雪渓があった。この雪渓を何の気はなしに見ていると、白い雪の上をちょこちょこ動いているものがある。よく見ると“オコジョ”のようだ。ピョンピョンと飛び回っている。珍しいので写真を撮っておこうと思い、ザックからカメラを出そうとしゃがむと、からかうように近くによって来て、また雪渓の方にいったりと急がしい。動き回るのを追っかけるのがやっとなで、やっと一枚だけ写真を撮ることが出来たが、出来上がった写真を見るとどこにオコジョがいるのか良くわからなかった。

下りの鎖場を下りていくと、垂直に近い岩にへばり付くようにして建っているこわれかかった避難小屋が見え



ブロッケンを見る



上 劔岳山頂より
左 劔岳山頂

てきた。ここで登りと下りの登山道が別れ、本格的な岩登りとなる。地図によると避難小屋のほぼ上に行くコースと巻いていくコースがある。そこでルートを探したが、どこにも矢印などの表示もなく迷ってしまったが、避難小屋から少し戻ってみて探してみることにすると避難小屋の右の方の岩に矢印があり、“頂上へ”と書いてあった。

一寸のあいだ鎖の連続でただひたすら上へ上へと行く。鎖を登りきると前に岩ばかりの頂上が見えてきた。頂上へはもう一度下り岩ばかりの道を行くと 7時57分頂上に着いた。一服劔で前劔に登っている人を見たが多分その人達だろう。頂上には二人だけがいた。頂上では

ちょっと休み、写真を撮る。しかしこの時またガスが出てきてしまった。今日中に帰京するので早々に下山を始めると、光りの加減か、上からの方がルートを探しやすかった。下りは避難小屋に向かって左側のトイレの横に出てくる。登りのルートを探している時、こんな急なところ登れるかなと思ったがそこを下りて来たのだった。

前劔への最初の鎖場で上から「劔へは大変ですか」と言う声にその方を見ると、同室だった大阪の人だった。その人と別れるともう一度前劔の頂上へ登る。一服劔の方を振り返るとはるか下の方に一服劔が見える。ずいぶん登ってきたのだなと感心してしまった。そしてその後ろの方には、昨日泊まった劔山荘が見えていた。劔沢小



屋、室堂へ行くバス道路なども見える。

これからまた下りの連続だった。一服剣ではもうまじかに小屋が見えているので休まずに小屋へ。小屋に着くと、剣に行った人、室堂に下山していった人と、もうみんな出払っているのだろう。小屋の叔母さんとアルバイトの女の子が外で日向ぼっこをしていた。

■ 駆け足で信濃大町へ

剣御前の小屋までは雪渓を二つ越して約1時間。昨日とは違って周りの景色がよく見える。剣沢小屋にもテントは二、三張り。人も出払っているようだ。剣御前の小屋までのあいだに出会ったのは一人だけだった。剣御前の小屋には11時48分に着く。ちょうど昼どきだったのでそこで何か食べることにする。しかし、室堂から先のこと心配なので、ゆっくりしていたかったが20分ほどいだけで剣御前の小屋を出発することにした。

建物の影から出て雷鳥沢への下山口まで来ると、強い風にあおられた。九月とはいえTシャツ一枚だったのでちょっと寒かった。ここからはもう登りはない。雷鳥沢まで岩屑の歩きにくい下り一方の道だった。雷鳥沢に近くなると、イオウの臭いが鼻に付くようになる。40分ほどで登山者が数人休んでいる川岸に出たが、そこは雷鳥平キャンプ場の一角だった。たしか数年前に来た時

は、たくさんのテントの間を通過してきたのだったが、今はテントはほとんどなく閑散としていた。

室堂ターミナルへの道は、所々に石を入れたコンクリート製で、観光客には歩きやすいかもしれないが、ザックを担いだ登山者にはちょっと歩きにくい。みくりが池温泉あたりまで来ると観光客の数も増え、登山姿で歩いているのが肩身が狭くなる。1時45分、見覚えのある室堂ターミナルに着いた。そこはもう観光客で一杯でゆっくり休むことはできないので、すぐ一階まで行き、汗でびしょ濡れになっているTシャツやニッカをはきかえ、顔を洗いさっぱりする。2時15分発のバスの改札をまだしていたので、バスに飛び乗ったが、運よく座ることができた。ここから扇沢まではバス、ロープウェイ、ケーブルカー、トロリーバスと連続で乗り継いでいくことになる。

◎ 簡単なルート ◎

- 9/15 立山駅 → 称名滝 → 大日平 → 大日小屋【泊】
- 9/16 大日小屋 → 大日岳 → 奥大日岳 → 室堂乗越 → 別山乗越 → 剣山荘【泊】
- 9/17 剣山荘 → 前剣 → 剣岳 → 剣山荘 → 別山乗越 → 雷鳥平 → 室堂 = 扇沢

北アルプス周辺山行記録

山行日	一日目	二日目	三日目	四日目	五日目	六日目
70/08/25~28	新宿駅→(夜行) 滝本峠→滝沢	滝本峠→滝沢 上高地→長瀬山→雄ヶ岳	滝沢→滝沢→奥高 雄ヶ岳→滝沢→上高地【木村小屋】	奥高→滝沢	滝沢→松本【松本城】→新宿駅	
73/08/21~27	滝行出発 栗駒岳	上高地→西福山荘	西福山荘→上高地(西福高岳山頂へは雨のため中止)	西福高岳の予定雨のため中止		
74/09/06~08	夜行出発	上高地→西福山荘				
74/10/20~21	上高地→滝沢小屋	滝沢小屋→天狗原→上高地				
75/09/21~25	夜行出発	中房温泉→滝沢	滝沢(台風通過のため停泊)	滝沢→大天井岳→雄ヶ岳→ヒコシテ	雄ヶ岳→上高地	
78/10/06~10	夜行出発	中房温泉→滝沢→大天井岳	大天井岳→滝沢→雄ヶ岳	雄ヶ岳→大福山→滝沢	滝行	
79/09/22~24	上高地→滝沢	滝沢→前穂高岳→奥高	奥高→滝沢→雄ヶ岳→上高地			
80/10/10~15	新宿駅→上高地→ 原屋(雄尾山三)	滝沢→滝沢→北穂高	北穂高→滝沢→(パノラマコース・原屋 岩の頭を往復)→滝沢→上高地			
85/05/02~05	滝行	滝沢大町駅→滝沢→滝沢→新穂高小 屋	新穂高小→滝沢→別山→真砂岳→大波山→雄山 →のぼり→神土山→至堂→立山→首山→ 鏡平山→双六小屋→三度連岳→三保山 荘→鷹羽岳→水鏡小屋	上野駅		
85/08/14~18	上野駅→(夜行)	富山駅→猪野谷→栗駒温泉→新 穂高温泉→ツチノ平小屋→鏡平山		水鏡小屋→水鏡岳→水鏡小屋→野口五郎 岳→黒瀬子小屋→黒瀬子岳→黒瀬子小屋	黒瀬子小屋→高瀬ダム→七竜→信 濃大町駅→八王子駅→松原駅	
86/08/13~17	上野駅→(夜行)	富山駅→猪野谷→栗駒温泉→新 穂高温泉→鏡平小屋	鏡平小屋→雄ヶ岳→南岳→南岳小屋	南岳小屋→北穂高→滝沢→雄尾山	雄尾山→滝沢→上高地→松本駅 →吉住寺駅→松原駅	
87/08/11~14	新宿駅→(夜行)	松本駅→上高地→滝沢→滝沢→滝沢 小屋	滝沢小屋→北穂高→滝沢→奥高	奥高→白濁沢谷→新穂高温泉→高 山駅→古岳駅→東京駅		
88/08/12~16	新宿駅→(夜行)	信濃大町駅→滝沢→雄岳→滝池小屋	滝池小屋→雄岳→雄ヶ岳→五峰岳→五竜川 小屋	五峰小屋→西松岳→赤塚の崎→天狗の頭 →白馬雄ヶ岳→前穂高上小屋	前穂高上小屋→白馬岳→白馬岳→ 雄倉→白馬駅(バス)→新穂 高	
88/08/15~20	上野駅→(夜行)	富山駅→折立→大朝倉平→京新沢 小屋	京新沢小屋→雄の平→三長山→三郎五郎 小屋	三郎五郎小屋→北の又岳→赤松平小屋	赤松平小屋→松原寺→赤松平小屋 →折立→富山駅→(夜行)	上野駅
89/09/14~17	新宿(高尾バス)→	立山駅→御名滝→大日平→大石小屋	大石小屋→大石岳→桑大石岳→桑堂乗越→ 別山乗越→別山	別山→前穂→別山→別山→別山乗越 →雄倉平→桑堂→黒沢→信濃大町駅→松 本駅→新穂高		
94/08/11~14	新宿駅→(深夜バス)	新穂高温泉→小池新道→オオノマ タ→鏡平小屋	鏡平→弓折岳→新穂高→空ヶ岳山荘 泊)→雄ヶ岳(運用)	空ヶ岳山荘→新穂高温泉→高山 →名古屋→東京駅		
96/08/12~15	新宿(深夜バス)	新穂高温泉→西福山荘→西穂高岳 運用)→西福山荘	西福山三(台風の為行動出来ず)	西福山荘→雄岳(運用)→中屋温泉→高 山駅→古岳駅→東京駅		
98/08/08~11	新宿(深夜バス)	新穂高→西福ロ→ブウエイ→西穂高 岳→西福山荘	西福山荘→西穂高→ジャンダルム(運用)→栗穂高岳(運用)→雄高岳山荘	雄高岳山荘→滝沢→上高地→新道(バス)		
99/08/11~16	新小岩(車)→雄 倉温泉(夜行)	雄倉温泉→日馬大池→栗駒岳(運用)→日馬大池	日馬大池→小蓮山(運用)→日馬岳(運 用)→三尾峠→言倉岳遊観小屋	遊観小屋→言倉岳(運用)→小松ヶ原→ 朝日岳→朝日小屋	朝日岳(運用)→松海新道分岐 →雄倉温泉→日馬村(夜行)	白馬村→東京
00/08/21	新小岩(車)→黒 沢(夜行)	黒沢→(旧新道)→雄池山荘→新 丸岳→雄池山荘→滝沢→戸屋				

尾瀬なのに静かだった笠ヶ岳

山行日：96/07/27

★ 鳩待峠では休まずに行く

地元車優先なのか、戸倉に着いた時には列の後ろの方に停車していた私達の乗ったタクシーは、4時の時報と同時に戸倉のゲートが開いた時には2番目を走っていた。まだ日の出前の暗い林道を10分も行くと、見覚えのある建物が目に入ってきた。鳩待峠である。鳩待峠の駐車場に着いたのは4時10分頃だった。

最初の計画では鳩待峠の休憩所で仮眠をしようと思っていたのだが、次から次ぎに着く車から降りてくる人達が入ってきて、仮眠どころではない。そこで鳩待峠の休憩所では軽い食事をしただけで、至仏山と笠ヶ岳の分岐になる小山沢田代まで行くことにした。

峠から少しのあいだ樹林の中の緩やかな登りを行くのだが、まだ時間が早いためかそれほど暑くはなく楽である。ちょっと急になった所で10人ほどの家族連れを追い抜く。右側が開けた所に出たが、至仏山らしい山は霞んでいてあまり良くは見えなかった。鳩待峠から1時間くらいだろうか、小山沢田代の水場に着く。右側の沢にはまだ沢山の雪が残っていた。ここからちょっとの登りで、真ん中に木道のある小山沢田代に出る。木道の周りを見ても花はあまり咲いていないようだ。タクシーで一緒だった人が、今年は2、3週間花が遅いと話していたことを思い出した。

木道を歩いて行くと、左側に道標があり笠ヶ岳への分岐を示していた。

分岐から樹林の中を5、6分も行くと前が開け雪田が見えてきた。雪の上を通り登山道に入ると前の立木に山名板がつけられていた。ガイドブックに「見落としてしまいそう・・・」と書かれていたその山名板は、こげ茶

の地に白で悪沢岳と書いてあり、右上に小さく「KUM O」と書かれていた。YAMAROOM等では良く見聞きしているのだが、見たのは初めてである。

樹林の中の道はしっかりしているのだが、所々に倒木があり、道を塞いでいる。右手の樹林の中に雪田が見えてきたが、道はそのそばを通過して登りになり、小笠が見えてきた。登山道は小笠の下を巻いている。上まで行く踏み跡もあったが、登山道のすぐそばにある岩の上に腰掛けて休む。近くを見廻すと白や黄色、ピンクといった色の小さな花が一面に咲いており、すぐ先には笠ヶ岳の山頂が見える・・・はずなのだが、ガスでちらちらとしか見えない。

★ 笠ヶ岳山頂は360度の展望

笠ヶ岳へのコースは、登りやすい登りがないので楽である。小笠から少し行った所で樹林帯に入り、今まで前方に見えていたピラミッド型をした笠ヶ岳のピークが見えなくなったが、次に樹林帯を出た時はもう笠ヶ岳の下だった。左前方には片藤沼だろうか、二つの沼が見えその前には所々に高山植物が咲いている。登山道は笠ヶ岳側に多少登って行くが、すぐ水平移動になり一向に頂上



悪沢岳の山名標識は木に括り付けられていた

への登りにはならない。一ヶ所岩の間の草付きにかすかな踏み跡があり、頂上へ向かっているようだったのでそこを強引に登ることにする。右の方が高そうだったので右の方に大岩の基部をまわって行くと、這い松にはばまれてしまい引き返す事になってしまった。その後多少戻り、左の踏み跡を行くとあっけなく山頂に飛びだした。

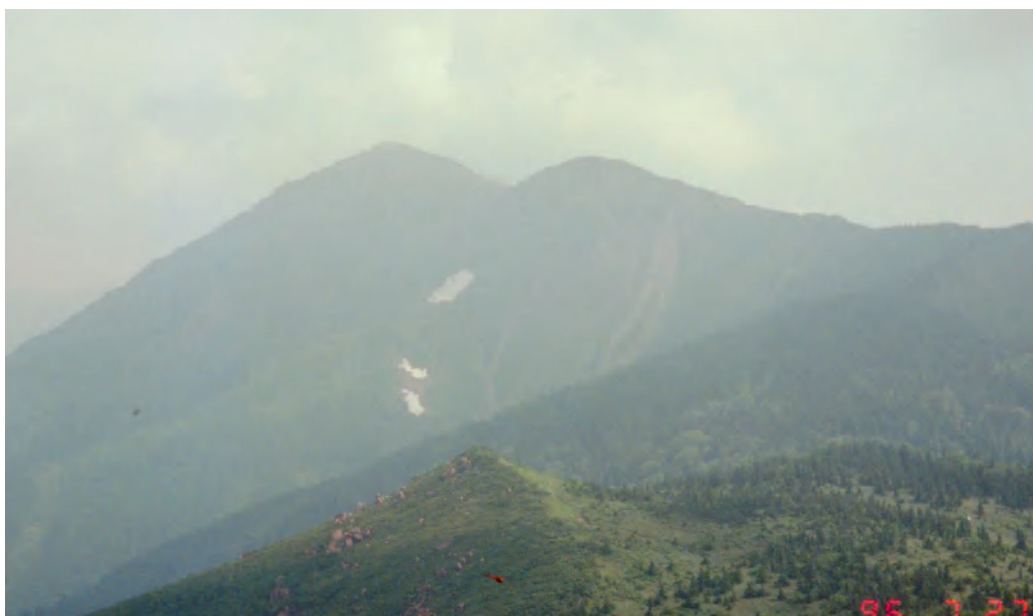
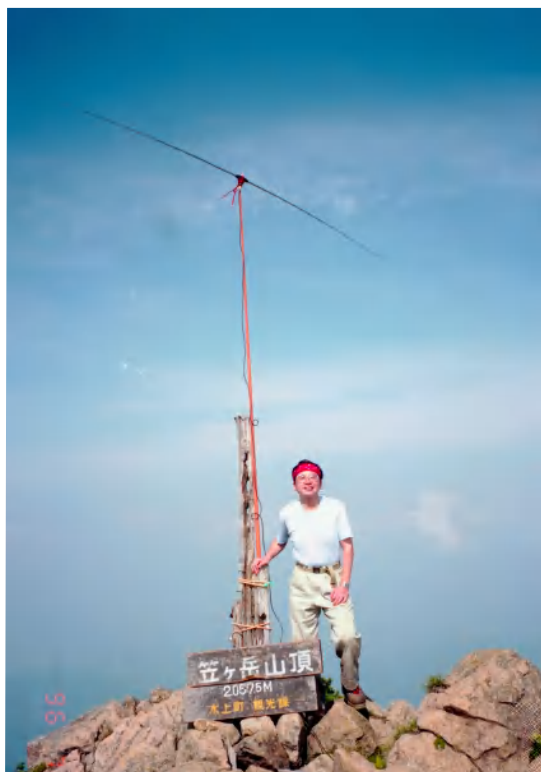
笠ヶ岳の山頂には岩が点在しており、アンテナのマストを固定するには好都合な2m程の杭が立っていて、その少し先に三角点が飛び出していた。時間は7時40分。仮眠しなかったので予定より大分早く笠ヶ岳についてしまったが、他の登山者がいないうちに無線をやることにして、早速準備に取り掛かる。

ワッチしてみるとやはりロケーションが良いのだろう、まず大阪茨木市の移動局が聞こえる。早速コールしてみると53-53でQSOできた。家から持ってきた缶ビールを飲みながらワッチを続けるとパイルになっている局がいた。安達太良山から出ているJN1DJ局だった。その後2、3局とQSOした頃ザックにつけた鈴を鳴らしながら、正規の登山道を登ってくる人がいた。50歳位の人で私と同じJRの臨時で沼田まで来てバスで来たという。この人にアンテナを入れた写真を撮ってもらい少し話しをする。その後、湯の小屋温泉で温泉に入ってから帰るのでといって、1時間ほどで下山していった。

50.270付近で誰か出ていないかとダイヤルを回して行くとJN2BFN局の声が聞こえ、3エリアの混信が

あるが急いでRSレポートと移動地を送る。その後、徳島県の小松島の移動局がCQを出していたのでコールする。今回一番の遠距離の局だった。

天気は相変わらず晴れていて、山頂には日陰になるものが何もないので日に焼けてしまった。そろそろQRトしようと思い、もう一度ダイヤルを回していると、アサヨ峰から出ている局がいた。QSOしたことはないのだが、何か見た(?)ことのあるコールなので呼んでみると、『山と無線』のメンバーのJH2EKD局だった。



上 笠ヶ岳山頂に
アンテナを上げる

左 山頂からの眺め



★ 下山は湯の小屋温泉へ

山頂では約2時間のんびり無線をやっていたが、その間山頂にやってきたのは4人だけだった。今日は天気が良いので至仏山などでは大変な人だろう。そのため鳩待峠に戻らずに湯の小屋温泉に出て水上に向かうことにした。ゆっくり行っても4時間あれば行けるだろうから、湯の小屋温泉で温泉に入っても水上行きのバスには間に合うはずだ。

アンテナやトランシーバーをザックにしまい下山にかかる。下りは片藤沼を見ながら、雨でも降ったら滑って恐そうな正規の登山道を下る。降りついた所は小山沢田代と湯の小屋温泉方面への分岐になっている。

片藤沼では休まずに蛸池まで行き、そこで今降りてきた笠ガ岳を眺める。笠ガ岳はここで見るのが最後で、これから先はほとんどが樹林の中となる。そのためその後山を見たのは咲倉沢頭避難小屋で上州武尊を見た時だけだった。避難小屋まではそれほど急な登りや下りはないのだが、何しろ暑い。多少でも風景が見えれば気分転換にもなるのだが、樹林の中なので駄目。取合えず避難小屋まで行って休もうと先を急ぐことにする。

幅の狭い沢にかかっている壊れた橋を渡り、ニヶ所ほど水場を過ぎだいが行った頃ひょっこりコンクリートブ

ロック製の避難小屋が見えてきた。ここで30分ほど休んでから出発する。

笠ガ岳を出てから避難小屋まではそれほどのアップダウンはなかったが、ここからはかなり急な下りとなる。50分程降っていった頃、林道の終点で広場のような所に降りついた。ここから林道歩きかと思って先を見ると、前の斜面に木の梯子が取り付けられてあり、「登山道」と書かれた矢印があった。登山道はここから林道に沿って山の中に行く。もう一度林道に出るとそこには前と同じように10数メートルほどの小高くなった所があるが、登れそうな所はなく、仕方が無いので林道を迎いを見ながら行くと、林道には似つかわしくないケルンがあり、かなり急だが下へ踏み跡が続いていた。そこから20分も行くと林道がY字路になった所に出るが、湯の小屋温泉には左のゲートのある方に行くようだ。

湯の小屋温泉にはずっと林道を行くのかと思いながら歩いて行くと、左に「登山道」という矢印があり、また山の中へ入る。日に照らされて林道を歩くのかと思っていたので助かる。もう湯の小屋温泉までは近いのだろう、どこかで飼っている犬の鳴く声が聞こえている。小さな沢に沿って降りて行くと、ほんの少しで舗装道路だった。

夏の日の馬頭刈山

山行日：95/08/27

● 8月の暑い日になぜ奥多摩へ？

よほどのことのない限り夏の奥多摩などに登ることはないだろう。そのよほどのことが「五日市町」にあった。

9月1日（95年）から西多摩郡五日市町と秋川市が合併して「あきる野市」になったが、その市政施行前に西多摩郡五日市町の山から無線運用をしようというのである。このようなことがない限り、奥多摩の「町」などに移動しても6mでは見向きもされないだろう。

最初は戸倉三山が良いのではないかと思ったが、多分行ったら三山を縦走することになるだろうから運用時間はあまり取れない。しかし往復登山のできる山ならば、運用時間もとれるだろうということで、地図を見ていて見つけたのが馬頭刈山だった。

● 十里木から炎天下の山行が始まった

今回の山は駅から近い山でもあり、山頂まで1時間ちょっとで行ける山なのだが、早く帰りたいこともあり、家を5時40分頃にでることにした。

立川駅まで約1時間。青梅線／五日市線のホームに行くと立川発武蔵五日市行き電車に乗るのだろう、登山の格好をした人が結構いる。暑いのに物好きはいるものだ。

五日市駅に降りると十数年前によくきていた頃とほとんど変わっておらず、バスの待合所は駅を出て左に行った所にある。そこで時刻表を確認していると、ちょうど「十里木経由払沢の滝行」のバスが入ってきた。私が乗る上養沢行のバスは1時間以上待たなくては来ないので、このバスで十里木まで行きそこから歩くことに

した。

バスには登山の格好をした5、60代の7、8人のグループと二人連れの二つのグループが乗っていたが、十里木で降りたのは私と二人連れのおばさん達だけだった。このおばさん達は馬頭刈山に登り大岳の鍾乳洞の方へ下りるらしい。

バス道を落合橋を過ぎて歩いて行くと左の川の方へ下りる細い道があり、「大岳山、馬頭刈山」という標識が出ていた。昔は「軍道」のバス停まで一気に降ってきたような気がしていたので変だなと思ったが、ちゃんと標識が出ているので、それにしたがって行くことにした。ガイドブックのコピーを持ってきていたおばさん達も「ガイドブックに書いていない」といいながらもその細い道を下りて来た。

川に突き当たるとそこにはバンガローなどが建っていて、地図を確認すると秋川ケビン村となっていた。そして川の左岸には最近作られたらしい立派な石畳の道が上流まで続いているようだ。「ガイドブック」にはこの道のことは書いてないらしいが、上流に向かってこの道を行くことにした。途中飛び石伝いに右岸に渡り、もう一度渡りかえして少し行くと、突然りっぱな道はなくなってしまった。建設予算が足りなかったのだろうか。

あたりを見回すと少し戻った所に急な道があり、バス道に出られそうだったのでその道を行くことにした。しかしその道は他人の家の敷地の中を通っているようで、表札代りに「猛犬注意」と書かれた看板がでていた。冗談だったらいいなと思いながらも行くと、本当に道の真ん中に大きな犬が寝そべっていた。しかしこの犬は吠えるだけで飛び掛かってはこなかった。犬も暑いのでばてていたのだろう。

バス道に出て更に行くのと雑貨屋があり、店先の冷蔵ケースには冷たそうに冷えたビールが入っていた。帰日も多分十里木まで歩くことになるだろうから、ここでビールを買って飲めるだろう。そんなことを考えながら日に照らされたバス道を急ぐ。

消防団の倉庫の前を通り過ぎると小学校や郵便局の建物が見えて来ると、「軍道」のバス停だった。

指導標にしたがって小学校の横の急な道を登り、家と家との間の細い道をぬけ、右に曲がり、左に曲がりして行くと川の横にある馬頭刈山への登山口が見えてきた。登山口には車2、3台が止められるスペースがあり、物置らしい建物の横には水道が引かれていた。

登山口の横にある狭い川は軍道地区の住宅の水源にでもなっているのだろう、途中のポンプで汲み上げているためか、ここでの水量は少ない。この川の右岸をたどって行くと、突き当りに一軒の廃屋があり、そこで軍道地区から登ってくる林道を横切り、すぐまた山道に入る。しかしそこからは樹林のある登りとなるが、前日に雨でも降ったのだろう、土がちょっと濡れていて滑りそうだった。

樹林の中の道はセミが賑やかに鳴いていてうるさいくらいだ。また道は木で日が遮られるため日陰にはなっているが、それでも暑く、たびたび風のありそうな所で立ち止まり休んだ。

● 高明山は高明神社の裏山

荷田子への分岐をすぎて少し行くと、石作りの立派な鳥居をくぐる。道は多少勾配も緩くなったようだ。高明神社の参道ということなのだろうか？。

前方に屋根の崩れたような建造物が見えてくると、登山道のすぐ脇に「大杉神社」と書かれた立派な石碑が建っているところに出る。そしてその横には山の中には不釣り合いなほど大きな賽銭箱が置かれていた。しかしまたなんでこんな急な道の途中にあるのだろうか？。そんなことを考えながら急な道を登って行くと、さっき見えていた屋根らしい建造物の所まで来た。そこには大きな木の切り株があり、その上に屋根を載せていたのが崩れたものらしい。説明書があったが木に墨で書かれたものらしく、はっきりとは読み取れなかったが、多分神社の

ご神木でもあったのだろう。切り株の大きさから判断するとかなりの樹齢の木ようだ。しかし下の石碑には大杉神社となっていたが、地図では高明神社。二つの神社が同居しているのか、それとも一つの神社に一般的な名称と正式名称があるのか、不思議なことである。

そんなことを考えながら、切り株の横にある急な階段を上って出た所は、小さな祠と高明神社跡と書かれた立て札しかない広場だった。広場の中央部分が一段高くなっている所を見ると、そこには以前神社の建物が立っていたのだろう。そういえば階段の脇には屋根がわらや廃材が置かれていた。しかしここはまだ頂上ではなかった。広場の隅に立っている標識を見ると、高明山の山頂はここからまだ少し登った神社跡の裏山になるようだ

広場の左にある道を登って行くと、ほんの少しで右手に一部木を伐採した空き地があり、その中央付近に立っている木に山名標識らしい板が打ち付けてあった。ここには帰りによるので先を急ぐことにする。地図をみた感じでは馬頭刈山の頂上までは後ちょっとのようだった。

道の左側に白い建物が見えてきた。馬頭刈山の頂上には休憩所があるように地図には記載されているので、それだろうか？しかし頂上らしくはないなと思いながら近くまで行くと、その建物はトイレだった。

そこからほんのちょっとで左側（南側）が開け、そちらに張り出すようにして作られた展望台のある、馬頭刈山の頂上についた。

● 日に照付けられた馬頭刈山の山頂

実際の馬頭刈山の山頂はそれほど広くはなく、山名の書かれた大きな木柱が真ん中に立っていて、誰が植えた花なのか今を盛りと咲いていた。そして南側に実際の山頂と同じくらいの広さの場所を、展望台として水平に張り出し、山頂を広くしてしまっている。そして展望台の下にできた空間は、当初は休憩所にでもなっていたのだろう、ベンチや机らしいものがあったが、今では荒れ放題になっていて、雨宿りするぐらいなら我慢できるがそこで休む気にはなれない。

さて山頂は南側が開けているため、午後の太陽にまともにてらされ、展望台の手すりと一緒につけられている鉄製の腰掛けには暑くてまともに座れない。これだった

ら鉄板でも置いておいたら本当に目玉焼きができそう
だ。

じりじりと日に照らされ、動きまわるのもしんどい
のだが、無線をやりに来たのでアンテナを建てなければ
ならない。今の時期この山頂にはそれほど人は来ないだ
ろうから、どこにアンテナを建ててもそれほど迷惑には
ならないだろう。そのため展望台の手すりに括りつける
ことにした。

アンテナをあげてちょっと一休みしていると、バスで
一緒だったおばさんの二人連れが登ってきた。そのうち
の一人の人が「ああ これが目だったんですね」と話
し掛けてきた。どこまで行くのか聞かれた時、馬頭刈山
で遊んで帰ると話していたので、不思議そうにしてい
たが、これで合点が行ったのだろう。その人達は写真
を撮ったりして、日の照付ける山頂を出発して行った。

運用の前に食事をするにすることにして日陰を探したが、め
ばしい所はなく、西側にあるちょっとした木の影で食事
にすることにした。風さえふいていれば少しは涼しいの
だろうが、木の葉はピクリともしない。食事をした所ま
ではフィーダーが届かないので、アンテナの位置を少し
移動して、リグだけでも日陰になるようにした。

最初は CQ を出している局をコールしていたが、探す
のも面倒になったので、50.245 付近で CQ を出す。「五
日市町移動」というのは効果があり、奥多摩の山岳移動
にしては結構呼ばれることになる。

● 高明山によってから下山

高明山まではちょうど 10 分。最初気が付かずに通り
すぎてしまったが、神社跡の広場が見えてきたので、通
り過ぎたことに気が付き、引き返すとすぐ立ち木に打ち
付けられた標識に気が付いた。山名だけを達筆で書かれ
た標識はこの山の雰囲気にはマッチしているようだ。しか
しここがなぜ山頂になるのか、尾根の一部としか思えな
いのだが・・・。

ここからはもう下るのみである。大きな鳥居の少し先
に荷田子への分岐があったが、道のわかっている軍道へ
の道に行くことにする。

林道を横切りふたたび山道に入ると、川に沿った道を
行くようになる。ここでちょっと顔を洗って行くことに
する。冷たくて良い気持ちだった。

馬頭刈山の山頂にあったバスの時刻表には 15 時台に
軍道を通るバスはなかったが、軍道のバス停について時
刻表をみると 15 時 31 分に五日市駅行きがあり、10 分
ちょっとの待ち時間で済みそうだ。最初は十里木まで歩
くつもりだったので、途中の雑貨屋で売っていたビール
が飲めなくなったが、まあビールは帰ってからにしよ
う。

今日は夏休み最後の日曜ということだからなのだろ
う、道は渋滞していて、バスは十里木からさき歩いた方
が早いぐらいの超ノロノロ運転だった。またバスの車内
も家族連れで満員。乗った時から降りるまで立ちっぱな
しだった。

(おわり)

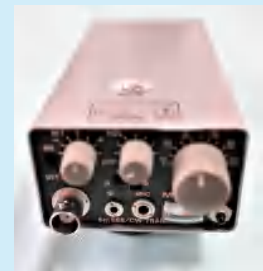
山によく持っていく無線機



FT817ND



FT690



ピコ6 S

落葉を踏みしめ滝入ノ峰へ

山行日：97/11/02

● 急登しばし、滝入ノ峰への分岐が

満員のバスを降りるとすぐ皆足早に歩いて行ったが、私はまずバス停のベンチに腰掛けておにぎりや稲荷で腹ごしらえをする。バス停の前の広場では十数人の中高年のグループがストレッチを始めた。このグループと一緒に賑やかそうだったので、急いで身仕度を整えて先に出発することにした。

東日原のバス停は以前来た時と変わりはないようだったが、周りにこんなに沢山家が建っていたのだろうか？。そんなことを考えながら東日原のバス停から中日原方面へ少し行くと、住宅の間に“天目山”への標識があり、コンクリート舗装の急な道を登って行くと、昔ながらの登山道になった。今も昔のまま登山道の脇に民家があり、ちょうど外に出ていたおばあさんと挨拶をする。「今日は随分と沢山の人々が登って行きましたね」とい

う。この家のまわりには沢山の花が咲いていた。

その民家から少し行った所から道は多少広くなるが、急登となり奥多摩工業の柵が見えてくると登山道は植林の中をジグザグを切って登って行くようになる。ここの急登で三組ほど登山者を追越す。ほとんど日帰りの軽装備だが中にはかなりの大荷物を背負ったグループもいた。長沢背稜を逆行するのだろうか。

40分ほども行っただろうか、左にカーブする辺りに二人の登山者が休んでいた。

● 落葉のじゅうたんを踏み滝入ノ峰のピークへ

登り始めてからまだそれほど時間は経っていなかった。休んでいる人の横を通過しようと左側にあった看板を何気なく見ると、「滝入ノ峰三角点 ↑」とマジックで書いてあるではないか。予想ではもう少し行った所だと思っていたので、まだ左側を注意して見ようとは思

っていなかった。看板には「尾根を外さずに」とか「赤テープあり」などとも書かれていたが、木々の紅葉する今の時期、木の葉の紅葉と紛らわしいため、ほとんど「赤テープ」はわからなかった。

分岐から落葉のじゅうたんを踏み尾根をめざしていく。このところ何日も雨が降っていないため、完全に乾ききった葉っぱは歩く度にかさかさという音をたてている。分岐からほんの一投足で尾根に出ると、側面に数字の書かれた標石があった。滝入ノ峰の三角点に着くまでこの様な標石が幾つかあり、赤テープの分からない分ルート表示の役割をはたしてく



二枚の山名板があった「滝入ノ峰」山頂



日だまりの一杯水避難小屋

れた。

何ヶ所かやせた岩稜に行くが、左側が切れ落ちている所もありおっかない。珍しくビニール紐や何のためなのだろう、黒い袋が木に括りつけられていたのもしやピークかと思い三角点を探すが見つからない。前方にはまだ高そうなピークがあるようだが……。ここでトランシーバーを出していると珍しく登って来た人が居た。登って来た単独行の人も、誰もいないと思って来たらしくちょっと驚いた様子だった。この人に聞くとやはりピークはまだ先だろうという。

ここからは一旦急な下りとなるが、すぐどこが道とも分からない広い斜面を登っていくと、さっきの人が休んでいた。案の定そこが「滝入ノ峰」のピークで真ん中に三角点があり、山名板が二枚木に括りつけられていた。

山頂周辺には木が多いがほとんど葉を落としていて、三ツドツケから続く長沢背稜の山々。そして特長のある大岳山などが葉を落とした木々の間から良く見える。そして西側には斑に紅葉した山肌が見えていた。

ここまで分岐から約40分。またピークと間違えた所で多少時間をロスしていたので、急いで運用の準備を始めた。アンテナはいつものケーブルフィッシャーに括りつけたDP。木は沢山あるので固定する場所には困らないが、1.5mの回転半径があるため、どうしても木の枝に引っ掛かってしまう。もっともアンテナはほとんど固定したままで回すことはなかった。

トランシーバーは電源の関係でMFJではなく、今回

はFT690を持って来たが、CQを出してもあまり応答がなく、時間のこともあり、移動局4局とQSOしてQRTとした。

● 日だまりの一杯水避難小屋で食事

一杯水避難小屋へは、最初登って来た道を引き返そうかと思っていたが、三ツドツケ方向へ下っている踏み跡があり、入れ代わりに出発して行った人も先へ行っていたので、三ツドツケを見ながら尾根を辿ることにした。山頂からすぐ急な下りがあり、またかなり痩せた尾根もある。踏み跡ははっきりしないが灌木の間を通るとき、枝の折れている所が、人の通った証拠のようである。立ったままでは降りそうもない急斜面を行くと、右の木の間から道が見え、赤い服を着た登山者の姿が見えた。下りはあっけなく正規の登山道に合流することができたのだった。

山頂からは10分ほどで登山道に降り立った。斜め前にあった黄色い看板にもさっきと同じ人が書いたのだろう、マジックで「山頂まで20分」と書かれていた。時間と方向からすると『東京の山百山』（山と溪谷社）に紹介されていた、滝入ノ峰へのルートは多分ここからのようだ。

分岐からは今まで何度となく通った事のある、避難小屋への道に行く。今日は左にハッキリと三ツドツケが見えている。登山道のまわりの木々はすっかり葉の落ちたものもあるが、中には真っ赤に色付いたもみじも見るこ



とができ、目を楽しませてくれた。

30分ほどもそんな道を行くと右に大きくカーブして、目の前のちょっと高くなった所に一杯水の避難小屋が見えて来た。そしてその前のベンチでは数人の人が休んでいた。

滝入ノ峰でちょっと遊んでいたの、予定よりちょっと時間がかかってしまい、蕎麦粒山まで行って昼食にしようと思っていたのだが、ここで昼にすることになってしまった。昼食はパンにコーヒー。水を余り持っていなかったの、パックのコーヒーをコンロで温めただけだったが、今の季節、温かい飲物は良い。因みに凍らして持って来たポカリはまだ半分以上凍ったままだった。これからはそのまま持って来よう。

● 8年振りの蕎麦粒山山頂でコーヒーを沸かす

12時15分。食事を済ますと蕎麦粒山へ向けて出発することにした。ここから蕎麦粒山まではアップダウンのあまりない楽な道だ。

高い木の茂った登山道を少し行くと「一杯水の水場」があるが、何日も雨が降っていないこともあるのだろう（もともと水量は少ない）、水は一滴も出ていなかった。

ここから右側の開けたコースになる。20分ほど行ったところ前方に道標が見えて来た。そこには避難小屋で見掛けた単独行の青年が休んでいた。ここから右へは倉沢へのルートがあるようで、踏み跡が付いていた。この青年は雲取から来たそうで長沢背稜の水場はすべて涸れていたという。また、酉谷小屋跡には今新しい避難小屋を作っていたそうだ。天祖山から一杯水まで行く予定があるので、今度利用してみよう。1月頃には使えるのだろうか。

この人は先に行きますからと、出発して行ったが、ストックを二本使って飛ぶように歩いて行ったが、仙元峠の分岐の先でもう休んでいた。ここでこの人を追い越し蕎麦粒山への登りに入る。この道の両側は笹で覆われていて、中には人の丈以上の所もあり、笹をかき分けて行くことになる。途中で3人のおばさんグループが降りて来たので道を開けたとき、左前方に見覚えのある岩が目に入った。蕎麦粒山の山頂西側にある岩だ。

笹をかき分けさらに登って行くと小広い山頂に飛出した。何年ぶりになるだろうか、ほとんど変わりのない山頂だった。山頂には三人ほど登山者がいて、みな食事を・・・、と一人だけ登山道の下り口に座り込んだ人が無線をやっていた。アンテナが無いところを見ると（と最初は思ったが、後でよく見ると近くの木にホイップらしいアンテナを括りつけていた）430MHzだろうか。結構呼ばれているようだ。

時間は13時を過ぎていた。川乗山まで行って青梅線の鳩ノ巣駅まで下るには今の時期5時を過ぎるともう真っ暗になるので、ちょっと時間的には難しいところがある。もっともヘッドランプは持っているし鳩ノ巣駅まで



真ん中に三角点の飛び出た「蕎麦粒山」

の道は何回も通っているので大体分かるが、なにか今日は気が進まなかった。日向沢の峰での無線運用は別の日に笹ノ岩山とセットで行くことにして今日はまた東日原へ戻ることにした。

一杯水の水でコーヒーを沸かすつもりだったが、一滴の水も出ていなかったの、持って来た水で沸かしたコーヒーを飲みながらまわりの景色を眺める。

私の来る前から山頂にいた人たちは食事を済ませるとみな出発して行ったが、皆川乗山方面だった。これから川乗山へ行って下山すると早くみても3時間半。まあ楽な道には違いはないが・・・。

山頂の隅で無線をやっていた人は相変わらず呼ばれていたが、避難小屋に泊まっている人だろうか（小屋の中に一人分のシュラフなどが置いたままになっていた）。呼ばれていなければ一言はなそうと思っていたが、あきらめ東日原へ戻るため出発することにした。

● ルート変更し戻った東日原は大混雑

一杯水の避難小屋までは50分ほどだった。そこには蕎麦粒山の登りで出会った三人のおばさん達が休んでいたが入れかわりに「お先に」と言って下っていった。ここで10分ばかりお茶を飲んだり、菓子などを食べてから東日原へ降る事にした。

15時とはいえ今の季節ではもう陽の光はだいぶ弱くなっていて、山の陰などに入ると寒さを感じるようだ。二、三週間前にはそんなことはなかったのに、季節は確実に冬に向かっていくようだ。数時間前滝入ノ峰から降りて来て合流した登山道の近くに来たので、分岐付近の写真を撮っておく。ここから登山道は滝入ノ峰の裾をまくようについていて、左側には植林された木が茂り、右側は山の斜面になるので陽が当たらず薄暗い。その登山道は長い下りとなるが、その途中で、先を下っていったおばさんのグループに追付いてしまった。先に行ってくれと言うので先に行かせてもらう。追い抜いて少し行くと右側の尾根がだいぶ低くなり、登山道のカーブしたところに着いた。朝滝入ノ峰へ行くために別れたところだ。ここでも写真を撮っておく。

写真を撮り終え歩き始めて少し行くと、どこからともなく子供達の声が聞こえて来た。声のする方を見ると、

滝入ノ峰への尾根の上に3、4人の小学生がいた。楽しそうに落ち葉に埋まった斜面を滑っている。子供達だけなので地元の小学生だろうか。

ここから少し行ったところから道は急な下りとなり、奥多摩工業の柵沿いに行くようになるとジグザグを切って下って行く。しかし朝こんな急な所を登って来たのだろうか。今下って行くとかかなりの急坂だった。

最奥の民家が見えて来ると傾斜は緩くなり、少し行ったところから下にバス道路が見えるが、何か沢山の人の列が見えた。最初それがバスに乗る人の列だとは思ってもよらなかった。何かあったのか位にしか思わなかったのだが、コンクリートの坂道を下り、バス道路に出た時、それがバスに乗る人の列だった事がわかった。列の最後尾が道を曲がったすぐの所にあり、ちょうどバスが行ったようで列が少し前進した。

今日は連休の中日で天気も良かったので、多少混雑は予想していたが、これほどだとは思わなかった。西東京バスの係員が電話しているので、臨時便を出すのだろうか、いったい何時になるのだろうか。暇な人達は列の人数を数えたりしている。定期のバスが一台来るとすぐに出ていったが、その後が一向に来ない。もっとも道路が狭いから無理なのかもしれない。待ちきれなくなった人が歩き出したが、どこまで歩くつもりなのだろうか。そのうち二台続けてバスが来ると列もだいぶ進み、四台目のバスに乗る事が出来た。

奥多摩駅でも混んではいたが始発ということもあり、こちらは座って行く事が出来た。その後、御嶽や鳩ノ巣などの駅でも結構乗る人があり、朝の通勤電車並みの混雑となった。

◎ 山行ルート ◎

奥多摩駅 = 東日原バス停 → 滝入ノ峰
→ 一杯水避難小屋 → 蕎麦粒山 → 一杯
水避難小屋 → 東日原バス停 = 奥多摩駅

◎ 運用設備 ◎

F T 6 9 0 + 3.5 mH ダイポール

立派な登山道のあった筈ノ岩山

山行日：98/06/21

テレビの天気予報を見ると土、日は梅雨の中休みとかで、「くもりのち晴」という予報。そこで久しぶりに奥多摩に行ってみることにした。コースは余り人の行きそうでない所ということで、川乗橋から鳥屋戸尾根を蕎麦粒山へ登り鳩ノ巣方面へ降るといもの。このコースには一度行ってみたかった筈ノ岩山がある。しかし、私はやはり「雨男」だったのか、天気予報とは違い、くもりのち雨になってしまった。

★ 登山口には立派な看板が

奥多摩駅からのバスを川乗橋で降りたのは2、3組だけだった。昨日は雨でも降ったのか道は濡れている。7時40分、身仕度を整え、軽く屈伸運動などをしてから川乗谷林道を歩き始めた。筈ノ岩山に関しては昭文社の地図などにもコースは書かれておらず（帰ってきてか

ら書店で立ち読みした98年度版には薄く破線が書かれていた)、JCAのYAMA-ROOMにも最近登ったという記録が無い。しかし、昨年JF2HBH局とQSOした時に登山口の情報を聞いていたので、歩き始めるとすぐ左側を注意しながら行くことにした。

林道を歩き始めてからすぐ、前方右側にカーブミラーが見えて来るとすぐ左に、最近付けられたらしい立派な「筈ノ岩山登山口」という標識が目にはいった。その先を見上げると急な植林帯の中を道がジグザグについている。

斜面をジグザグを切って登り始めると登山道の土はまだ柔らかく、最近整備されたのだろうか。しかし10分も喘ぎながら登って行くとしっかりとした道になる。杉の植林地帯なので昔からの仕事道なのだろうか。少し行った所で前を単独行の人が登って行くのが木の間からチラチラと見えるようになった。川乗橋の付近には車は止られていなかったで、同じバスで来た人だろう。

登山口から1時間ほど登って来ていたので、どこかで休もうかと思ったが適当な所がなく、そのまま行くとかかなり急な斜面を登り、大きな石のある所に出た。「筈ノ岩山」というからその辺が山頂かと思ったが、まだ先に高そうな所があるのでさらに登って行く。

大きな岩のあった所から少し行った所でまた急斜面に出た。さっきはほぼ直登だったが、今回は多少左へトラバースするような感じで登って行くと尾根に出る。右からの踏み跡もあるようだが、聖滝からの道だろうか？。ここからはほとんど水平に行くがまた急登が出て来たのでちょっと休憩することにした。筈ノ岩山の山頂は多分この急登を登ってから少し行った辺りだろうと思ったが、疲れていると注意力がなくなるので休むことにした



筈ノ岩山登山口の標識



笹ノ岩山山頂の山名標識

のだった。

ここで残っていたにぎりやアンパンを食べていると、追越した単独行の人が登って来た。かなり疲れているようでその人もここで休むことにしたようだ。その人が言うには笹ノ岩山のコースは「東京の山」という本に載っているという。そして「今 1200 m程あるからもうすぐでしょう」と言って私より先に急登を登っていった。私はここで 20 分ほど休んでしまったので、急いで行くことにする。しかし、今日は曇っていて全然太陽が出ないので涼しくて歩きやすい。

★ 見落としてしまいそうな笹ノ岩山山頂

急登を登りきるとあまりアップダウンの無い道を行くようになる。道の左側は笹や雑木が密生しているため、あまり注意せず前方を見て歩いていたが、多少下り加減になって来た所で左側を注意してみると細い踏み跡があり、そばにあった木には赤テープが巻き付けられていた。踏み跡の先を見ると少し高くなった所に赤白のポールと山名板のようなものが木に取り付けられているのが見え、そこが笹ノ岩山の山頂のようだった。しかし、そこには先に行ったはずの単独行の人の姿は見えなかった。

山頂は周りを疎林に囲まれていて、10 人も来たら一杯になりそうな小広い空間があるだけで、真ん中に三等三角点が埋設されていた。展望はガスっているためか何も見えない。

今回の山行目的には笹ノ岩山での無線運用ということもあるので、まず運用の準備に取掛かる。といってもアンテナはダイポールなので、いつものマストにエレメン



トを括りつけて枯れ木に縛りつけられれば OK。ワッチしながら缶ビールを飲むことにした。

ちょうど 3 エリアの藤井寺市の移動が強く入っていたので呼んでみたが 2.5 W にダイポールではちょっと無理だったようだ。

今日は E スポも出ていないようなので C Q を出してみることにする。すると J H 1 Q Z W 局が呼んで来てくれた。今日は道志村の御牧戸山からだという。向こうもガスで視界が悪く午後からは雨になりそうなのでもうすぐ降りるといつてきた。こちら木に囲まれているのでハッキリは判らないが、ガスがかなり流れて来ている。カードは夏のハムフェアということでファイナルとした。その後 3 局と Q S O したが、ちょうど山頂に単独行の人が来たので Q R T とした。

アンテナや無線機をパッキングし、写真を撮ってから 10 時 55 分出発することにしたが、笹ノ岩山には 1 時間 5 分もいたことになる。しかし余り人の来ないコースだと思っていたが、結構来る人がいるようだ。

★ ガスで展望のない鳥屋戸尾根を歩く

縦走路が見えているのでもどっても良かったが、単独行の人（この人は手前の分岐を見過ぎて反対方向から



川苔山山頂

登って来た) やアンテナを片付けている時にやって来た若い夫婦連れの降りていった方向に行くことにした。その道はすぐ笹の藪をかき分けて行く様になるが、すぐ立派な登山道にでる。そこからは多少アップダウンがあるものの快適な登山道だが、ガスでほとんど遠望がきかないのが残念だ。40分ほど行った所で明るい所に出たのでちょっと休憩することにした。それほど疲れてはいなかったが樹林の多い所を歩いてきたので、樹林がない所も良いものだ。ここは晴れていれば川苔山方面が見えて良い所なのだろう。

休んだ所から10分ほど行った所で左側の木に「S H C 長尾山」という標識が打ち付けられていた。2.5万図にある1339mの地点だろうか。ここから少し行った所でガスのために良く判らなかったが、蕎麦粒山らしい山影がかろうじで確認出来た。そこからさらに行くともた急登があり、登りきった先に大きな木が道を封鎖していた。多分日原や川苔山方面からの登山者を鳥屋戸尾根に入らないように遮断しているのだろう。封鎖されている道の方向には「巡視路」という標識が付けられていた。

道を封鎖している木を越えて行くとちょうど十字路のようになった所に出る。そこには東京都の白い看板があり、「蕎麦粒山頂」という標識があった。ここでちょっとした間違えをする。それは日向沢ノ峰で無線をやるため、蕎麦粒山はパスして巻き道を日向沢ノ峰に行くつもりだったのだが、鳥屋戸尾根からの登山道は蕎麦粒山頂からいつも見ている南側を登るものだと思っていたので、巻き道はまだ先だろうと思い、標識の示す方向へ登

って行ってしまったのだった。何回も蕎麦粒山には来ているのだが巻き道は通ったことがなかったので、気がつかなかったのだろう。

蕎麦粒山山頂に着くと笹ノ岩山であった単独行の人が食事をしていた。時間は12時15分だった。私もここで昼食としたがメニューはいつもと同じパン。単独行の人は東日原を14時40分のバスに乗るといって出発していったが、そのあと笹ノ岩山方面から十数人の団体が来たのには参ってしまった。ちょうどお湯を沸かしてコーヒーを入れ、ゆっくりと飲もうと思っていた矢先だったが、急いで飲んで退散することにした。

天気が悪くなりそうだったので鳩ノ巣方面に行く予定を東日原にしようかと迷っていたが、団体さんは話の様子では東日原に行くようなので、既定方針通り鳩ノ巣駅行きにした。

翌日途中であった人の言っていた『東京都の山』(山と溪谷社)という本を書店で立ち読みすると鳥屋戸尾根のコースが出ていたが、川乗橋から入り東日原に下山するように書かれていた。単独行の人や団体さんもこの本のコースを参考にしたのだろうか。

蕎麦粒山から鳩ノ巣駅へのコースはもう何年振りになるだろうか。10年くらい前は良く歩いたのだが最近では歩いていなかった。12時55分、団体さんの賑やかな声のする蕎麦粒山山頂を後にした。

この後快適な道を飛ばして日向沢ノ峰まで行ったが、当初予定していた無線運用は時間的に無理なのであきらめたが、川苔山は久しぶりだったので(10年振り8回目)登ってから鳩ノ巣駅へ下山した。しかし、ほとんどガスで何も見えず、鳩ノ巣駅への下山途中では雨になってしまった。

◎ 山行ルート ◎

奥多摩駅 = 川乗橋 → 笹ノ岩山 → 蕎麦粒山
→ 日向沢ノ峰 → 川苔山 → 鳩ノ巣駅

◎ 運用設備 ◎

F T 6 9 0 + 3.5mH ダイポール

青柳から歩いて登った入笠山

山行日：94/08/06~07

● 昔のメインルート、青柳駅からの

『入笠山ハイキングコース』

8月6日、6時40分に新宿駅を出る「特急 あずさ81号」に乗車、青柳駅は「普通」しか停車しないので、小淵沢で後から来る普通列車に乗り継ぎ、青柳駅についたのは9時22分。待合室で着替えをしてから外に出ると日の光がまぶしかった。昔はかなり広い駅舎があった青柳駅だが、現在では無人駅となっており、自動券売機とベンチが4つほどある待合い室だけになっていた。

駅舎を出ると幅の狭い川にかかったコンクリートの橋を渡り、2、3軒の商店の立ち並ぶゆるい坂をあがって行くと甲州街道（信州往還）に出る。入笠山へはその少し先の歩道橋をわたり、山に向かってゆるい坂を上っていく。たしか昔は「入笠山」という標識があったと思うが、現在はなく「金鶏金山」という看板が目についた。

青柳駅から7、8分ゆるい坂を上って行くと、良く注意していないと見落としてしまいそうな「三平ハウス、



青柳駅

入笠湖」という標識が左側にある。ここを左折して田圃の中の簡易舗装の道を行くと「左 三平ハウス 右 入笠山」と書かれた分岐に出る。ここからが入笠山へのハイキングコース(?)となる。

連日東京では30度を超す日が続いているが、涼しいはずの富士見高原でもやはり暑い。十数分歩いただけでももう汗をかいてしまった。これからが大変だ。とりあえずTシャツ1枚になる。

普通は登山口あたりは多少整備されているはずだが、あまり人が歩いていないためなのだろう、分岐からすぐ雨で溝の出来た道は、石がゴロゴロして非常に歩きにくい。しかしそれもほんの少力で「入笠山ハイキングコース」の標識が出てくると、樹林の中の道はしっかりした歩きやすい道になる。そして標識が分岐に限らず、しつこいくらいに立っている。これも昔のメインルートの名残なのだろうか？

青柳駅から約1時間。ちょっと傾斜のある樹林の中の道を登って行き、熊笹が道を覆うようにして生えている所を通過すると、林道との分岐にひょっこり飛びでる。昔は「一本松展望台」という標識があったような記憶があるが今はなく、見晴茶屋も閉鎖されている。また林道の標識には、昔はたしか「御射山神戸（みさやまごうど）へ」となっていたと思ったが、今では「すずらんの里駅へ」となっていた。

この道を下って行くと富士見駅と青柳駅のほぼ中間に出るが、そこに何年前かに「すずらんの里」という無人駅ができ、スズランの季節には特急も停車するそうだ。

ここから芝平峠の分岐まで長い林道歩きとなるが、そ



入笠山山頂を見上げる

の間には、見晴茶屋の他、君影茶屋、お花茶屋、鐘打山荘など多くの小屋（茶屋）があったが現在ではすべて閉鎖されているか、個人の別荘ということになっている（私が行き始めた頃も休業の所が多かった）。また、芝平峠から入笠山の直下（御所平峠）までの間にも入笠小屋、山彦荘、鈴蘭小屋、マナスル山荘、紅葉軒といくつかの山小屋があるが、今では通年営業の小屋は1軒だけ。夏休み期間中だけ営業の小屋は3軒だけとなっていた。またちょっと離れたところに三平ロッジがある。

なぜそれほど広くない範囲に、10軒近くの小屋があるのかというと、今から40年近く前は、スズランやたくさん高山植物があり、また高山蝶のいる山ということで非常に人気のあった山だったらしく、60歳代の登山者から「若いときにスズランを見に登ったことがあった」ということを良く聞くんですよ。と私達がいつも泊まっている小屋の主人が話してくれた。

さて旧見晴茶屋からは林道になるが、なるべく日陰を探していく。旧お花茶屋のある辺りから芝平峠への分岐までを鐘打平といい、道の傾斜はやや緩くなり日陰が多くなる。

芝平峠への分岐をすぎ少し行くと閉鎖されているが、

最近できたゴンドラの駅に行く自動車道が左から合流している。登山者(?)がゴンドラの駅に行くには、入笠湿原の中を通って行くようだ。

私がこのゴンドラに乗ったのは去年の8月。このときは富士見駅からの定期バス(1日往復2本しかない)で入笠山まで行く予定だったが、ゴンドラが前の年の冬にできたということを知ったので、物珍しさも手伝ってゴンドラで行ってみることにしたのである。

このゴンドラは、今年(94年)の6月に事故を起こして新聞にも載っていたので、ご存じの方も多だろう。この時の雷は御所平峠にある小屋の自動販売機や山の中にあるたった1台の公衆電話を壊してしまったそうだ。

御所平峠にある小屋(というか旅館に近い)に着いたのは12時半であった。

● 夕方山頂から無線運用

なぜ今回に限ってわざわざ10Wのリニア(F T 690 + F L 6010)や3エレのH B 9 C Vを持ってきたのかというと、Q S Lを整理していて20回以上も行ってはいるはずの、入笠山のQ S Lが1枚もなかったからなので



ある。しかし考えてみるとFDコンテストへの参加は入笠山ではなく、御所平峠をはさんで反対側にある大沢山（小入笠山、大沢の頭ともいう）からであり、入笠山の頂上に行くのは、日の出を見るとき、周囲の山を見に行くくらいで無線をやろうということは考えたことがなかったようだ。

缶ビールを飲んでちょっと部屋で横になったら、1時間ほど寝てしまったようで、急いでトランシーバとリニア、ニッカドバッテリー（2.2AH）など一式をサブザックに詰め、三脚ケース（だと思ふ。布製の入れ物）に入れたアンテナを持って山頂へ急いだ。

このぐらいの時間になると多少日も傾いて来ているので、風さえあれば涼しいだろう。それと入笠山は登山者が多い山なので、多少広い山頂とはいえやはり大きいアンテナは邪魔者になる。

案の定私が頂上に着いたときには2組の登山者しかおらず、私が下山するときには頂上で星の観測をするグループが登ってきただけだった。この山は頂上に何もいないため、星などの観測には最適なのだそう。山小屋（？）の中には大きな天体望遠鏡を収容したドームまで備えた小屋もある。

御所平峠から山頂までは20分弱。お花畑と牧場に挟まれた登山道を登っていく。お花畑は冬はスキー場になるが、それ以外の時は立入禁止になっており、登山道の反対側は、放牧している牛が出ないように有刺鉄線や電流を流した柵が設置してある。

頂上にはまるで樹木の類はなく小広くなっている。ほぼ中央に周囲の山の説明をした円盤がありその横に三角



入笠山山頂

点が、そして展望盤をはさんで反対の所に直径が約20センチ、高さが約2メートルの標柱が立っている。

入笠山の山頂は360度の展望があるが、今日は雲が出ていて八ヶ岳と甲斐駒ぐらいしかよく見えなかったが、天気さえよければ富士山から北アルプス、中央アルプス、御嶽山、浅間山と数え上げたらきりがないほどの山々が見える。しかしそんなに見えたのは、20年以上登っていても2度ほどだけだった。

アンテナは3エレメントのHB9CV。八木に比べて多少ゲインがある反面、部品点数が多くなってしまった。今回持って来た物は、10年前木曾御岳から木曾郡と益田郡のJCGサービスを行った時に製作したもので、移動用（エレメントなどの長さを背負って来るのに便利ないように短くした）に作ったため、固定で上げるものに比べ、部品点数がさらに多くなり、そのため組上げるまでに大分時間が掛かってしまった。このへんは改良の余地が多分にありそう。

その組上がったアンテナはもちろん頂上の標柱に縛り付ける。もっともこのようなことができるのは、夕方から早朝までの登山者の少ないときだけだろう。ただしこの時間帯は天体観測をしている人達にとっても言えることで、時々コンテストで来ているグループと天体観測をしているグループとの間で、アンテナが邪魔だとかライトで星が見難いとかいった、小さなトラブルが起こるようだ。

アンテナが上がったのが遅く、食事でも下山するまでの1時間ほどしか運用時間がなかったため、取りあえずFT690単体でCQを出してみたが応答はなし、そのため急いでFT6010をつなぎCQを出してみるがこれもだ

め。今の時間帯はコンテストのためのセッティングがすみ、一休みしている時間帯なのかもしれない。そこでCQを出している局をつかまえることにした。

北埼玉郡の局がCQを出していたのでコールしQSOする。そのあと今のQSOを聞いていた局がコールしてきた。昔よくQSOしていたが、引っ越してしまったため15、6年ぶりのQSOだった。下から「ごはんですよ」のコールがあるまで20局弱のQSOだった。

夜中は出ず早朝コンテストに出るため、アンテナは一応下ろしてから下山することにした。

最近の6メータは静かなので通常の日とコンテスト前後の日とは違いがあるだろうが、今回入笠山山頂からは、10Wに3エレで1、2、3、4、7、9、0エリアとQSOができた。

● 下山はゴンドラで

下山はゴンドラで降りることにする。というのは、富士見駅までバスでもいいのだが、バスは11時と13時40分の2本しかなく、ゴンドラなら9時30分から17時まで待ち時間なしで動いているため、ただしゴンドラを降りた所から富士見駅までバスがあるかが問題だった。これは、冬のスキーシーズンはバスの運行があるが、今は運休中でタクシーを呼ばなければならなかった。

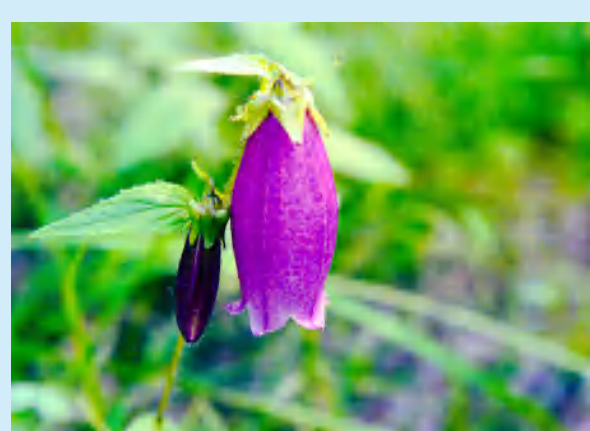
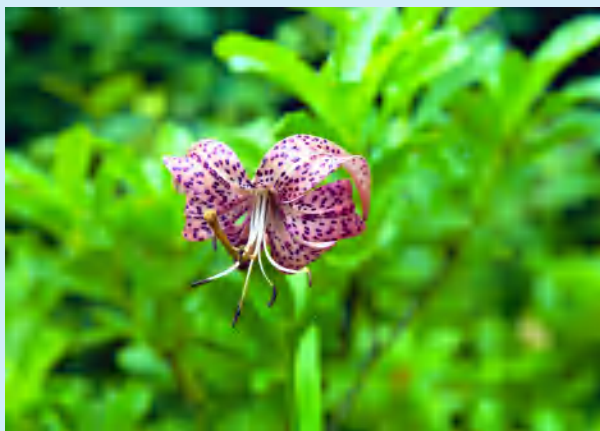
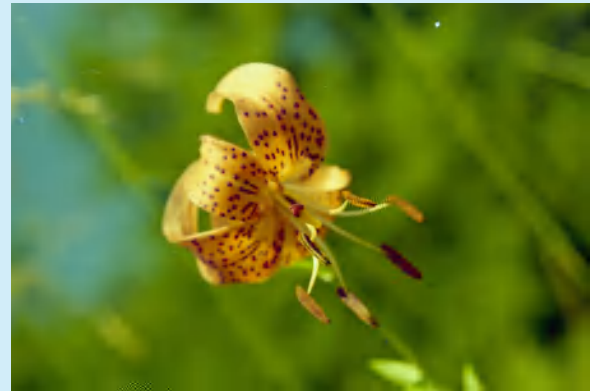
◎ 山行ルート ◎

新宿駅 = 青柳駅 → 一本松展望台 →
鐘打平 → 御所平峠 →
入笠山 → 入笠湿原 → ゴンドラ = 富士見駅 = 新宿駅

◎ 運用設備 ◎

FT690 + FL6010 HB9CV

入笠山周辺で見られる高山植物





yamaarukito & musen